

385.8
N83ウ



* 0054205000 *

0054205-000

385.8-N83ウ

西頸城年中行事

西頸城郡郷土研究会

昭和16

AIC

工卜 2B-68

385.8
N 83

事行中年城頸西

郡城頸西縣馮新

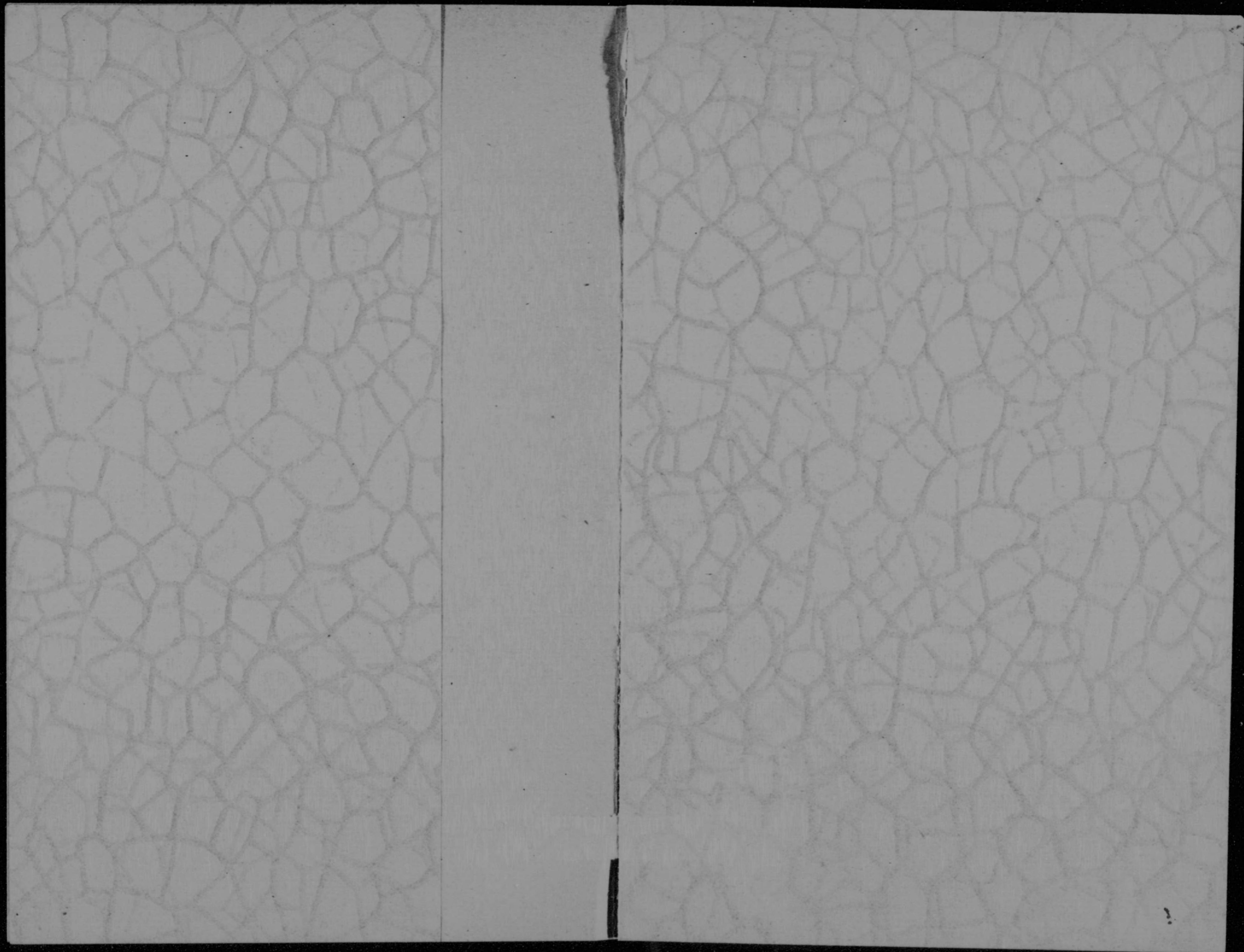
稿誌土鄉

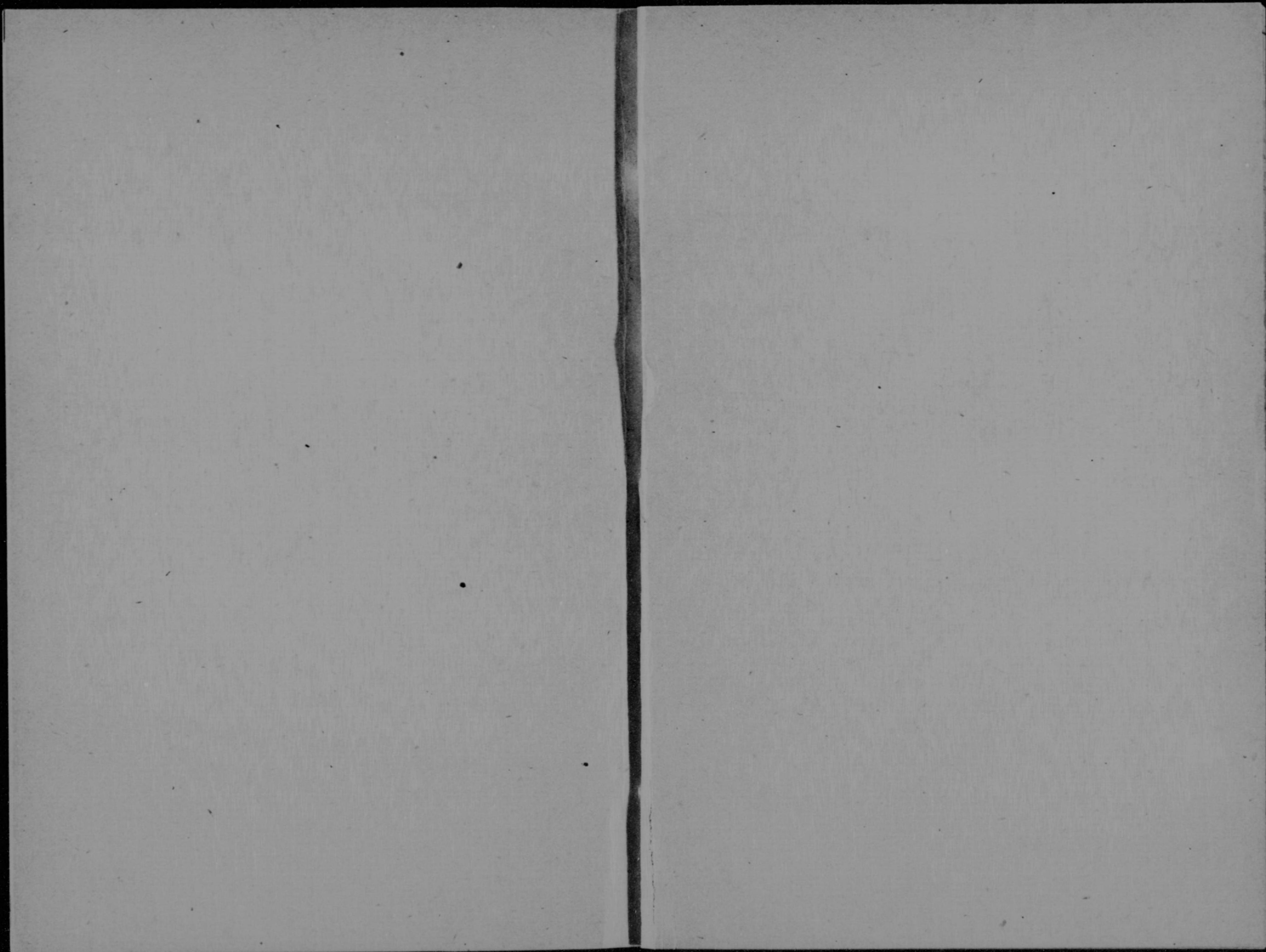
輯三第



納本

刊會究研土鄉郡城頸西





385.8
N83



新潟縣西頸城郡郷土誌稿 第三輯

西頸城年中行事

西頸城郡郷土研究會・刊



385.8
N83 (7)

919

295

この「西頸城年中行事」の印刷に就いては、電気化学工業株式会社青海工場の援助を受く。茲に銘記して、感謝の意を表す。



序

1

變轉極まりない今の世間に於いて、昔ながらの年中行事なごといふものは、日に日に刻々に消滅し去つてしまふのである。それを徒らに悲しまうとは思はないが、もう少し祖先の心の形見として、かうした書物にでもして、保存しておいたらとは、われわれのせめてもの念願であつた。

2

郷土を懐しむなごといふ事も、或は他國に流れ去つた者か、落日に向ふ年寄等の、世迷言に過ぎぬかも知れぬが、それらのものの胸裏に、去來をやめないものは、餘りにも鮮かな年中行事の繪巻物である。郷土の山と川とを背景にした行事は、魂をゆすぶつて止まぬ、懐しいものであつた。その理由は、もう少し親切に、問うてみる必要があらう。

いつの世から、われわれ名も無き庶民の間に、浸みこみ、流れ來つたか、まだ完全な、これら年中行事の年代記を作ることには、出來ないかも知れないが、遠い祖先の温い息吹を、その中に感じとることは、さう難しいことではあるまい。誠に「ふるさとの」に仕へて、敬虔を致さうとするのが、この國の民の、おしなべての心であつた。

年中行事の今の世に残る姿は、或は怪奇すぎるとしても、廣く遠く日本の端々と比較してみる。こによつて、案外もこの姿を尋ね得るまでに、この國の民俗の學問は榮えて來て居るのである。そして、今更ながら、昔の庶民の深い信仰に驚かされるのである。この書物を手にせられる人々に、もう一段の比較研究を勸説して置きたい。

部落に生れた一人の少年は、一家の年中行事に魂をゆだね、更に一部落の年中行事に、心を支配されないでは、濟まされなかつた。少くとも是も一つの昔の郷土教育であつた。しかもその家の、部落の年中行事は、廣く遠く日本民族の血に、つながつて居たのである。今はかうした、いはば土の教育を、もう一度考へてみるに、よい折であるかも知れぬ。

やたらに餅をつき、むやみに變り物を食ふやうに、この國の榮養學が教へてしまつては、食物による節供の味も、薄らいだかと思ふが、古人のくたぶれた心は、節供毎にくふ食物によつても新たな力を蘇らせて居たのである。曆なきも、この節供を知らしめるだけに、存在したと言つてもよい程であつた。

神に食物を捧げて、神と會饗することが、日本古來の風であつたことを、この年中行事は、その頁にでも語つて居る。それでこそ人の心を清く明らかなものになし得たのである。かうしたつ

まらぬ民俗の中に、案外尊い日本精神の、根強い鍊成があつたのかも知れない。さうした検討の資料としても、役立つてほしいと思ふのである。

8

この新しい國學に、一つの寄與をし得たのも、偏へに本會會員の篤學者による努力であつた。特筆して置く所である。更に是が分類・編纂の計畫と勞苦は、新潟縣立河原田高等女學校教諭青木重孝君の分擔であつたことを銘記したい。

昭和十六年十月一日

山崎 甚一 郎 識

例 言

一、本輯は、西頸城郡郷土誌稿第三輯として、年中行事を集録した。但し、農作と祭禮の行事は今後の採集に俟つこととした。

一、本輯は、昭和十二年に於ける會員の調査報告、並に昭和十四年八月に於ける青木重孝の採集をもつて、編纂した。

一、多分に異義の存する所であるが、凡そ五十項目に分類して編纂した。間々便宜に従つた所のあるは、體裁上やむを得なかつた。

一、各項目内では、行事の同一稱呼によつて、大體まとめてみた。同一行事の一括記載、或は比較にも、役立つためである。

一、更に詳細に訪ぬべきものも、極めて多いのであるが、それは是を一段階として、篤志家の今後の努力に俟つより他なかつた。

一、報告は出来るだけ原形のまゝ、全部良心的な採録を心がけた。多少誤ではないかと思ふもの

もあつたが、確め得なかつた。

一、現在既に減んだ行事・稱呼なごも、溯つて採集した。是が記載に當つては、出来るだけ發音式の假名遣にしたが、必ずしも嚴密に統一されて居ない。

一、間々編者の解釋をさしはさんだ所もあるが、それは文中に於て明瞭にした筈である。

一、調査部落を含む略地圖を添へた。調査地相互間の地理的關係を窺知するに、便せんが爲であつた。

一、最後に索引を添へ、語彙によつて、記載の頁を探れるやうにしてある。一種の方言辭典としても、多少役立つは幸である。

目

次

目次

序	
例言	
調査一覽	
一、節日總稱	一
二、大小の正月	五
三、年男の役目	八
四、元日の行事	一四
五、仕事始め	二〇
六、松の内	二三
七、七草前後	二八
八、倉開と舟祝	三二
九、若木迎と小年	三八

二五、六月一日	一〇一
二六、天王と土用	一〇四
二七、七月七日	一〇六
二八、精霊棚飾	一一〇
二九、盆中行事	一一四
三〇、盆の終り	一一八
三一、八朔前後	一二一
三二、十五夜	一二四
三三、芋名月	一二六
三四、九月三節供	一二八
三五、神送・神迎	一二九
三六、十日夜と刈上	一三一
三七、夷子講	一三三
三八、秋事など	一三五
三九、大師講	一三七

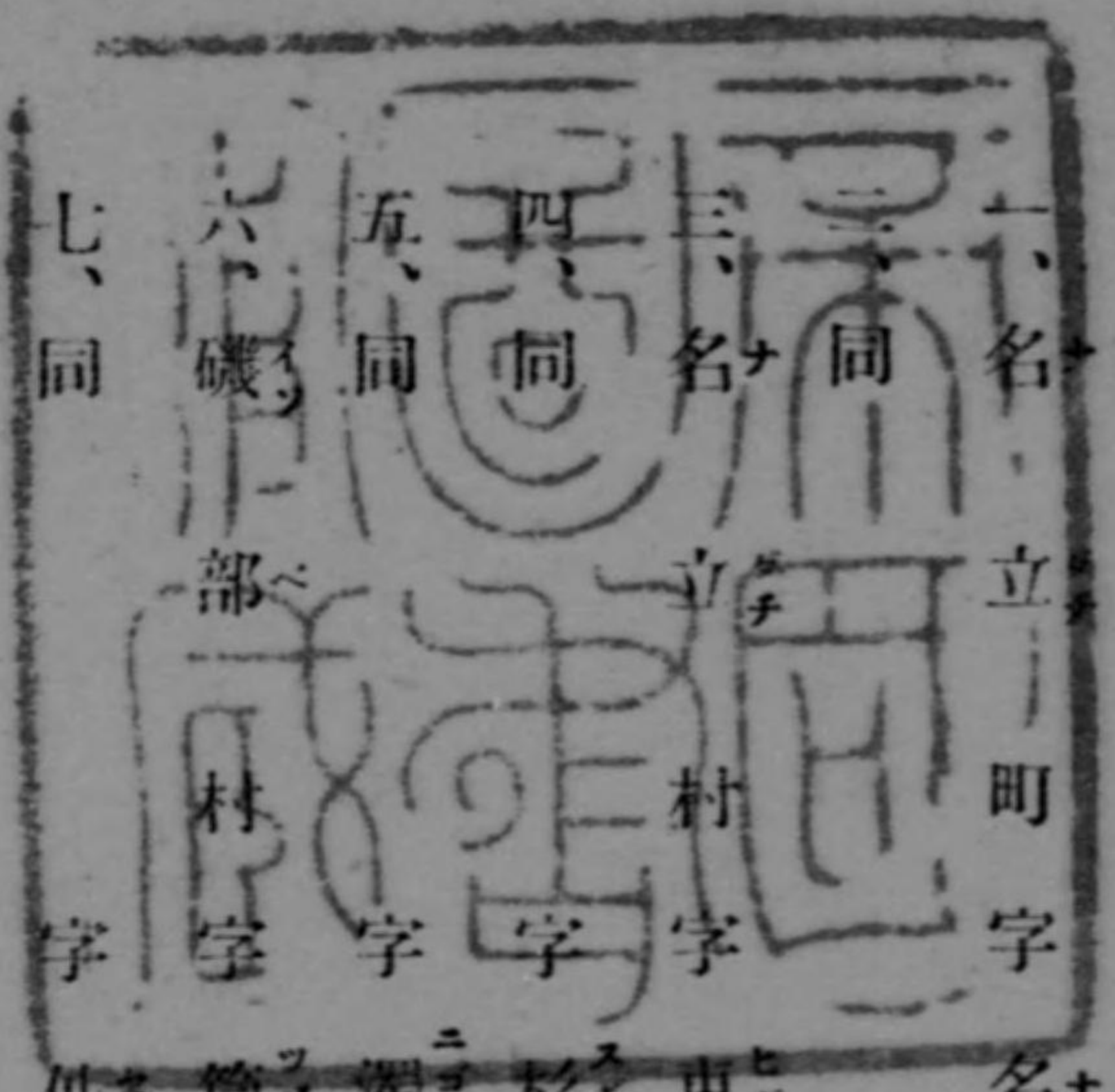
一〇、藪玉・稻穂等	四二
一一、十三月	四五
一二、祝箸・嫁祝・木責	四七
一三、田植正月	五一
一四、正月の占	五六
一五、鳥追・土鼠追等	六一
一六、塞の神	六八
一七、二十日正月以後	七五
一八、節分と初午	七九
一九、山の神前後	八二
二〇、涅槃と彼岸	八五
二一、雛節供	八八
二二、卯月八日	九二
二三、五月節供	九四
二四、海祭・水祭	九八

一〇、饗玉・稻穂等	四二
一一、十 三 月	四五
一二、祝箸・嫁祝・木賣	四七
一三、田 植 正 月	五一
一四、正 月 の 占	五六
一五、鳥追・土鼠追等	六一
一六、塞 の 神	六八
一七、二十日正月以後	七五
一八、節分と初午	七九
一九、山の神前後	八二
二〇、涅槃と彼岸	八五
二一、雛 節 供	八八
二二、卯 月 八 日	九二
二三、五 月 節 供	九四
二四、海 祭 ・ 水 祭	九八

二五、六	月一日	一〇一
二六、天	王と土用	一〇四
二七、七	月七日	一〇六
二八、精	靈柵飾	一一〇
二九、盆	中行事	一一四
三〇、盆	の終り	一一八
三一、八	朔前後	一二一
三二、十	五夜	一二四
三三、芋	名月	一二六
三四、九	月三節供	一二八
三五、神	送・神迎	一二九
三六、十	日夜と刈上	一三一
三七、夷	子講	一三三
三八、秋	事など	一三五
三九、大	師講	一三七

四〇、師・走・朔一日	一四〇
四一、御・瀨・座	一四二
四二、針・千・本	一四七
四三、松・迎・と・松・飾	一四八
四四、煤・掃・と・奉・公・人	一五三
四五、餅・搗・と・餅・飾	一五七
四六、年・神・と・懸・魚	一五九
四七、歳・暮・と・年・玉	一六四
四八、年・夜・の・行・事	一六七
四九、各・種・の・講	一七一
五〇、其・他・の・行・事	一七三
探訪記その他	一七五
西頸城略圖	
索引	

調査一覽



一、名・立・町・字・名・立・大・町	西・條・德・十・郎・氏
二、名・立・町・字・名・立・大・町	青・木・重・孝・氏
三、名・立・町・字・名・立・大・町	本・多・環・氏
四、同・立・町・字・名・立・大・町	水・口・三・郎・氏
五、同・立・町・字・名・立・大・町	青・木・重・孝・氏
六、同・立・町・字・名・立・大・町	中・川・大・作・氏
七、同・立・町・字・名・立・大・町	安・田・重・治・郎・氏
八、同・立・町・字・名・立・大・町	青・木・重・孝・氏
九、同・立・町・字・名・立・大・町	青・木・重・孝・氏
一〇、同・立・町・字・名・立・大・町	下・西・正・博・氏
一一、同・立・町・字・名・立・大・町	笠・原・秀・憲・氏

一、名・立・町・字・名・立・大・町	西・條・德・十・郎・氏
二、名・立・町・字・名・立・大・町	青・木・重・孝・氏
三、名・立・町・字・名・立・大・町	本・多・環・氏
四、同・立・町・字・名・立・大・町	水・口・三・郎・氏
五、同・立・町・字・名・立・大・町	青・木・重・孝・氏
六、同・立・町・字・名・立・大・町	中・川・大・作・氏
七、同・立・町・字・名・立・大・町	安・田・重・治・郎・氏
八、同・立・町・字・名・立・大・町	青・木・重・孝・氏
九、同・立・町・字・名・立・大・町	青・木・重・孝・氏
一〇、同・立・町・字・名・立・大・町	下・西・正・博・氏
一一、同・立・町・字・名・立・大・町	笠・原・秀・憲・氏

二六、同 字 砂^{スナ} 場^バ
 二七、同 字 越^{コシ} 岡^カ
 二八、下^{シモ} 早^{ハヤ} 川^{カハ} 村 出^{イデ}
 二九、同 字 上^{カミ} 玉^{タマ}
 三〇、同 字 育^{イク} 郷^{サト}
 三一、同 字 新^{アラ} 竹^{タケ}
 三二、同 字 新^{アラ} 塚^{ツカ}
 三三、同 字 新^{アラ} 根^ネ
 三四、同 字 新^{アラ} 嘉^カ
 三五、同 字 田^タ 八^{ハチ}
 三六、同 字 田^タ 郎^{ロウ}
 三七、同 字 瀧^{タケ} 屋^ヤ
 三八、同 字 瀧^{タケ} 原^{ハラ}
 三九、同 字 下^{シモ} 出^{イデ}

五十嵐清造氏
 金子實氏
 岡本清男氏
 小杉マサ氏
 玉谷秀雄氏
 竹原巳代司氏
 塚根嘉八郎氏
 五十嵐芳氏
 小藥正氏
 澤卓氏
 渡邊新作氏
 中村シズエ氏
 風間瑞穂氏
 丸田トミ氏

一二、同 字 川^{カハ} 詰^{ツメ}
 一三、同 字 東^{ヒガシ} 谷^{タニ}
 一四、同 字 東^{ヒガシ} 内^{ウチ}
 一五、同 字 島^{シマ} 道^{ミチ}
 一六、同 字 人^{ヒト} 澤^{サワ}
 一七、同 字 柱^{ハシラ} 道^{ミチ}
 一八、木^キ 浦^{ウラ} 木^キ
 一九、同 字 新^{アラ} 浦^{ウラ}
 二〇、同 字 中^{ナカ} 戸^ド
 二一、浦^{ウラ} 本^{ホン} 尾^ビ
 二二、同 字 鬼^{オニ} 脇^{ワキ}
 二三、同 字 中^{ナカ} 伏^{フシ}
 二四、同 字 中^{ナカ} 宿^{ヤド}
 二五、上^{カミ} 早^{ハヤ} 川^{カハ} 村 山^{ヤマ}

平塚文夫氏
 高橋中氏
 小池與三治氏
 山岸國廣氏
 青木重孝氏
 白鳥一郎氏
 白岩新之助氏
 金子泰司氏
 青木重孝氏
 星野太準氏
 山田忠造氏
 沼屋喜太郎氏
 青木重孝氏
 高瀬清藏氏

五六、同	五五、根	五六、同	五七、同	五八、小	五九、同	六〇、今	六一、同	六二、同	六三、青	六四、同	六五、歌	六六、同	六七、市
知	瀧	井	海	今	須	西	橋	今	橋	田	外	歌	市
村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村
字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字
山	根	山	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野
寺	屋	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺
寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺

青木重孝氏	上根知校殿	丸山星雄氏	青木重孝氏	小瀧校殿	青木重孝氏	飯野富作氏	室橋京氏	鳴海潤治氏	青木重孝氏	田海校殿	松田與三郎氏	青木重孝氏	和泉光雄氏
-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	------	-------	-------	------	--------	-------	-------

四〇、同	四一、同	四二、大	四三、同	四四、西	四五、同	四六、同	四七、同	四八、同	四九、糸	五〇、同	五一、同	五二、同	五三、大
和	和	和	海	海	田	田	田	田	魚	水	蓮	蓮	野
村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村
字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字
高	大	大	田	羽	田	田	田	田	寺	寺	寺	寺	寺
谷	和	和	和	和	和	和	和	和	野	野	野	野	野
根	根	根	根	根	根	根	根	根	根	根	根	根	根
根	根	根	根	根	根	根	根	根	根	根	根	根	根

加藤テイルイ氏	青木重孝氏	大和川校殿	青木重孝氏	伊藤藤正三氏	下村敬氏	秋山ユキ子氏	間島サツ氏	竹下治氏	小島要氏	笹井喜作氏	牧江教信氏	阿部進氏	大野村教育會殿
---------	-------	-------	-------	--------	------	--------	-------	------	------	-------	-------	------	---------

六八、同
 六九、上
 七〇、同
 路
 村字上
 路

青木重孝氏
 齋藤行雄氏
 青木重孝氏

一節日總稱

オリメ 「折目切目には、やつぱり心を新しうせんならん」とは、もとは何の意味か解らぬが大和川の老人は、學校の學期始めなごに、よく言つてゐた。この老人の口癖のオリメキレメとは節供といふ漢語の、今一つ以前のよび名であらう。

イワイビ 神にも人にも、御馳走を供へて祝ふ節供を、根知では祝日といひ、大人は變り物を食うて仕事を休み、子供はさつぱりした着物を着せられた。セチといふのは、正月に客を振舞ふ事であつた。

セチ 磯部の仙納では、正月中に、親類間で贈答するのを、セチと言つた。即ち尾頭附の小さい魚を、藁のマゲットツコに入れ、米二升位を吠に入れて、擔いで行くのである。すると吠の方は、米を少し残して返すといつた。所が、セチといふのは、嫁婿が二人連れで、正月二日に、里方へ泊りに行く事だと、西海・上早川では言ふ。下早川・今井では、嫁婿ばかりでなく、奉公人等が休養に實家へ歸る事をも、セチと言うてゐる。このセチは、今井は小正月中、下早川は正月

中に行はれる。西海では更に、お盆の十五日に里へ歸る事もセチである。

ムコノナベカレ 下早川では、二日正月に、婿が嫁の里へ行く事を、婿ノ鍋借レといふ。新しい吠に大小の餅を二つ、大は五升小は三升を入れ、その他一切の食物を持って行き、鍋を借りるだけ位であるといふ。名稱もそこから出たものであらうが、次の初節祝と同一かと思ふ。

ハツゼテイワイ 初嫁初婿が正月二日に、里方へ招かれる事を、西海の字田中では、初節祝といふ。この時は、一臼一つの鏡餅を作り、臺餅三枚の上に重ねて、新しい吠に入れ、お供に擔がせて行く。臺餅は廣いノシ餅で、皿中の一枚は、マメに過すやうにこ、豆餅にする。この餅は切つてはならない。下早川でも、同じ日に、セチといつて、同様の餅を持って、里方へ嫁は行くが、三枚のノシ餅は端を缺いて行くといふ。多分眞四角に凸凹を無くする事であらう。この餅は松と縛り合はせて、親類へ配られる。この例は、婿ノ鍋借レとさう區別されてゐるか明瞭でないが、歸りには、里方の人が、二人を送つて來るといふから、やはり初嫁初婿の場合であらう。

セチモチ 浦本では、正月十五日に、新婿が嫁の里へ持つて行く餅を、節餅といつた。新しい吠に一臼の餅を入れ、酒一升を添へて、擔いで行くと、嫁の里からは、袴と紋附一重が出された。この節餅は、嫁方の親類へ配られる。上早川では、正月二日に、新婿がセチに行く時、新し

い吠に入れる物は、二臼の大鏡と一臼の小鏡とを重ねて鬘斗を附けたもので、他に年玉として、反物と酒一升を持つのである。この方も節餅と言ふかは報告されてゐない。

アトセチ 上早川では、二日正月に、嫁と孫は里へ年始に行き、婿はセチに行くが、小正月にも亦、嫁婿孫は生家や母の里へヤブイリをする。後の方をアトセチと言つてゐるが、二つのセチの差異は、餘り明瞭にされてゐない。

ニバセチ 又同じ上早川の西山では、正月二日の方を一バセチといひ、二人連れで、佛前に供へる餅と、簡単な手土産とを持つて行くが、正月十六日には、餅は持たずに里へ行き、この方をニバセチと言ふ。ニバセチにも、やはり二人連れであるかさうかはわからぬが、近來一バセチも連立たぬやうになつたといふ。兎に角大正月と小正月に、二度同じ行事のあるのは、注意されねばならぬ。

セチヨビ 正月いつばいの中に、嫁婿なごを招ふのを、仙納や濁澤では、節招ビといつた。濁澤では、長方形の大きな餅を二切持つて、招ばれて行くのである。所が能生谷の二つの報告は、大年の晩、年取後、親分の家で、子分を招んで御馳走するのが、節招ビ又は歳暮招ビで、正月行ふのは年始招ビであると、區別してゐる。然し、現今では、歳暮招ビは行はれず、年始招ビだ

け存続するといふ。所が、同じ村の大澤では、歳暮招ビは大年の晩、節招ビは正月になつてからと、一老人は明瞭に區別してゐた。

セチカエシ 下早川の字育郷では、六月一日の年始シマイの事を、節返シともよんでゐる。上早川で節返シといふのは、正月四日の事で、嫁の里へ年始に來た新婿を、婿の家へ送つて行つて客になるのを言ふ。

二 大 小 の 正 月

オウシヨウガツ 小正月に對しての大正月であるが、その期間については、所によつて異つてゐる。元日を大正月といふのは、西海・今井・小瀧・根知の一部にあるやうに、報告されてゐるが、同じ小瀧でも、一日から四日迄、西海でも一日から七日或は十一日迄と、まち／＼になつてゐる。下早川の奥でも、一日から七日迄であつた。浦本では、松を飾り餅を食ふ間の、一日から七日迄が、大正月だといつた。

コシヨウガツ 小正月の方も、従つて區々で、一番短いのは、今井・根知の一部と、小瀧の正月十五日をさすものである。下早川の奥では、十四日・十五日・十六日の三日位を言ひ、浦本では、齒玉さいだまを飾り餅を食ふ間の、十四日から二十日迄を言つた。所が、西海の奥は、最ものんびりしてゐて、十五日から月末までを、大體小正月といひ、仕事を休むと報じてゐる。

トシコシ 西海の平地では、正月十四日から十五日にかけての年越シを、小正月と言ふとあるが、次の小年の問題と關聯するものであらう。

コドシ 正月十四日を小年といふ風は、郡内全部殆ど一致してゐる。この日の祝は、西海・上早川では、大年の御馳走に少し劣ると言ふ。たゞ能生谷の川詰では十五日だといひ、名立谷では十五日・十六日の二日間だと言ふが、是は小正月と比較して見る必要がある。コドシトリ やはり正月十四日を、小年取とも言ふので、是も廣く行はれてゐる。小年は小年取の省略であらうか。

コドシバライ 序に記して置くが、大年に一年中の勘定をする風は、一般であるが、正月十四日或は十三日に、残つた勘定をするのを小年拂といふ。

オウトシ 小年に對する語で、元日の前日を、大年といふのは廣く、大部分である。所が、小年を正月十四日・十五日の二日間とする、名立谷では、正月三日間を大年と稱する。

オウドシトリ 上早川の一部では、大年を大年取と丁寧に稱へるやうに、報ぜられてゐる。かくの如く、正月の元日前後と、十五日前後とを對立させて、重んずる風は、注意されねばならぬ。しかも此の地方に於ては、小年の方の膳は、少し簡略であるといふ向もあるが、行事はむしろ小正月の方ばかり、重いと云つてよいのである。更に郡内では、新曆の正月と、一月後の正月とが、到る所に混在して行はれ、恰も一ヶ月をおいて、正月が二度あるが如き現象を呈して

ゐるが、併せ考ふべきである。

三年男の役目

トシオトコ 糸魚川では、年男に親方の家へ入るのは、師走の十三日であつたと言ふが、正月の支度をする日は、この日からであつたらしい。今井では、大晦日の日、自分が年を取つてから主家へ行つて、年男になつた。名立町では、正月七日間朝晩、子分が来て、神棚のおこもりをしたものと言ふ。上早川では、年男になるのは、雇人或は分家の年輩者であるが、糸魚川では、出入の者や若者は、不浄が多いから、年男にはせぬともいふ。下早川では、嫁取り前の男がなるのが本當だといひ、能生谷には、家を相続する兄がなるといふ所もあつた。然し、浦本・木浦・能生谷では、家の戸主が自ら年男になつた。又別に浦本では、その年のエト當リの者を年男にする。以上の相異は長い間の變遷を物語るものであらう。

カミツカエ 大晦日には、第一番に年男が風呂をつかひ、神棚や供物の取扱をし、正月中でも女には手をつけさせないのが一般である。下早川では神仕、能生谷では神マカナイ、浦本では神ノキヨウジ即ち給仕といつた。

トシオトコノコ 年男だけは、年取の夜、神棚の下に居て、眠らずに夜を明し、神と共に年を取るといふ所は、能生谷・名立谷にあつた。西海・浦本では、正月七日迄、年男だけは、神棚の下で寢起して、正月の行事をした。浦本ではこの年男が、この期間中に子をなすと、年男ノ子といつて馬鹿な子になるといつた。

ヤスノゴキ 年男の管理する物に、ヤスノゴキがある。根知では、昔菓製のヤスノゴキといふ籠を門松につけ、もう中に何を入れたか、老人も知らぬと言つたが、正月七日の朝、雪がそれにとまつてゐると、その年は豊年だと喜んださうである。宇山寺のその老人は、作る事は未だに忘れず、作つてみせたが、輪繩の垂れてゐる菓を、もつと数多く出して、底を一つに結び、物を入れても、落ちぬやうにしたやうなものである。下早川でも、オヤスノゴキと言ひ、正月料理を色々入れた。糸魚川では、このオヤスノゴキの中に、一日から七日迄に、神佛にあげた雑煮を入れておき、七日に神の方は男、佛の方は女が食べる。空のゴキを外に出し、霞がたまれば豊作だといふ。いづれも門松や神様を、お養ひの御器である事がわかる。

ゴキヨウ 今井では、御松のゴキヨウといひ、矢張菓製の籠を、神棚の兩脇の松に、一つづつ着げた。中へは、正月一日から七日迄、魚の切目・餅・蕎麥・赤飯・御飯を入れて供へ、七草に

下して、家中で煮ていた。ゴキョウは御器の訛つたものである。

ゴケワン 浦本では、ゴケワンといひ、門松に結へて、中には餅を入れたと言ふ。ゴケワンは御器で、御器の意味が人の耳に遠くなり、解し難くなつた頃、椀の言葉がくつついたのであらう。

オワン 小瀧ではもう藁の苞とか、御椀とかいつて、正月七日間、日に三度づつ食物を入れて上げる。最後に是をオジャにして戴く。この御椀をつけるのは、神棚の柱とも、大小黒柱の松とも、報ぜられてゐる。こゝでは「年男を伐つて來な」なき言ふのは、この大小黒の松を指すのである。

ビク 能生谷でも、昔は藁のビクを、門松につけた。この中には、塩又はお祝の品を入れると言ふが、門松につけての時かきうか、明かでない。名立谷字濁澤では、寺の門松にだけ、藁ノ籠をつける風は残つてゐた。この籠に炭と餅とを、一切づゝ入れて置き、正月三日の間に、鳥が食べるとよいと言つた。炭の意味は不明である。

ワカオケ 年男は正月七日間、浦本でも今井でも、毎早朝第一番に起きて、水垢離をしてから神様に御タツバイをした。この水垢離の水を汲む桶を、浦本では若桶といつた。下早川では、若

水に桶を用ゐるのは、手桶の両手は夫婦で、手は睦まじく、桶は丸くて、年中丸つこく暮す爲だと説朋してゐる。

ワカミズ 糸魚川では、三日間の井戸水は、主人が先に汲んだ。小瀧では、元日の朝ギの水は男の人が早く起きて汲んでおき、一日中それを使ふ。能生谷では、桶に松と讓葉とを、昆布でしぼりつけ、新し、杓で年男が若水を汲む。下早川の若水を汲む作法は、もつとこみいつてゐる。年男がアキノ方にむいて、手桶に汲む時に次の唱へ言をする。一杓汲んでは天照皇大神宮、二杓汲んでは八幡大神宮、三杓汲んでは春日大明神、四杓汲んでは日本六十餘州の神々、五杓汲んでは家内安全諸々の神へ捧げ奉る。この何杓汲んではといふのは、動作の事で、多分口では唱へないのかと思ふ。この若水で、家内中に顔を洗はせる。名立谷では、元日の日は年ガツリだから、新しい水を汲んで沸かすといつたが、下早川では、若水を茶釜に汲み入れる時には、次の唱へ言をする。

春のはじめに何を汲む

こがねの水を汲む

水は千杯 し千杯

し干杯のしは、多分朱であらう。黄金干杯朱干杯から来たものと思ふ。今井では、若水につけた餅を食ふと若返ると言ふ。

○ハツミス 大和川では、お松さんを飾つてある間中、神に朝のお祝を上げ申す時は、井戸で身を清め、新しい水を汲んで来るが、今井では此の水を初水といった。下早川では神に供へる餅は若水で煮る。

○カンクノミズ 若水なごは汲まず、寒に入つて九日目の、寒九ノ水を珍重する所は、今井・浦本にある。今井では、この水を年中おいても腐らないとて、薬を煎じる用にする。浦本では、漬物・味噌に用ゐて腐らすと稱してゐる。

○シオバナ 下早川では、正月三日間、年男が松葉又はヌイゴの新しい葎につけて、家中にまく塩水の事を、塩花といった。木浦では是をも若水と稱し、寢間から居間へと、櫛の葉につけて、塩の入つた水を撒いた。能生谷にも、塩を入れた若水で、家中を清め、入口で外へ残つたのを捨てる所がある。

○アラビ 能生谷では、三ヶ日間、朝は新火をつけるといふ。此の三ヶ日、古い火をおいて、新しい火を切出す所は多く、いづれも年男の役目であつた。下早川の年男は、丑の刻に起きて、古

い灰をとりすて、塩水で爐を清め、火打石で豆殻につけて火口とし、新しい火を焚く。糸魚川・木浦・名立谷でも、豆殻を用ゐて火をつけるが、能生谷・下早川では、特に豆莢附とことわつてゐる。下早川では、この莢の附いた豆殻を、ハツキ豆といふ。糸魚川には、黍殻の穂で火をつくる舊家もある。

四 元日の行事

○ オツイタチ 元日だけをオ朔日とよぶ所は、全般である。名立谷の濁澤では、爐の鍵様まで改まると見えて、不思議にもこの朝は、アキノ方へ向いてゐると言つた。

○ ハツモウデ 元日の宮参りを、西海では、初詣又は初参りといふが、この風は全般である。年夜の行事の條にも上げてあるやうに、年夜に参拜して一日歸り、寢ずるに於て又元日参る所や、年夜には参らずに、元日だけ参る所や、年夜からすつと宮に籠つてゐて、元朝に参拜して歸る所なき區々のやうであるが、元は宮籠が正式であつたかと思ふ。大和川には、未明に鳴る氏神の太鼓を相圖に、全部落水神社に集つてお参りし、持参の酒肴で、合同年始をする所もある。名立谷にも全部落氏神に集つて参拜し、戊申詔書を奉讀して、年頭の辭を交す所がある。

○ イチモウデ 元日の早朝参詣することを、下早川では一詣といつてゐる。宇高谷根では、早くお宮に行くこと、その年のマワリ、即ち仕事の手廻しがよくなると言つた。西海では、一番詣いちばらうでの者には、神様がエモツを澤山くれるから、其の家は豊作に恵まれるといふ。そこではこの早朝の神

参りから歸つて寝ると悪いといふ。今井では、年男・若者・厄年の者は、除夜の鐘を合圖に宮へ行く。神主は、一番先の者から三番目の者迄には、一の筆から三の筆までの御札を授ける。根知では第一着になる事を、一ノ筆につくといひ、この者は一年中よいと言はれてゐる。大野では、昔は一ノ戸ヲツ、クといつて、夜中十二時から先を争つたが、今は三、四時頃が一番賑かで、各戸一人は必ず参つて、御燈明おあかしを上げる。

○ ハツクチ 下早川では、元日の宮参りには「初口を神様にあげる」と言つて、参拜の途中では誰にあつても、口をきかなかつた。青海の宇田海では、是を「初聲を神に上げる」といひ、今も守られて居る。

○ オハツホ 能生谷では、元日に、米を四合から一升位、御初穂といつて氏神に上げる。浦本の御初穂はフクデ餅で、是を神前に供へ、燈明を上げ、賽銭を投げて参拜し、神主に年始をのべ、オミオクを戴いた。この御供は、家内一同で分けて食ふ。これはあらゆる神聖な作法を、残らず行はうとするのである。

○ ハツマイリ 元日寺参りをする事を、上早川では、初参り或は年始といつた。そこでは供物餅と米を持参して、もう朝の二時頃には参つて、先着順に住職から御杯を受ける。此様に、寺へ

早く参ると、極樂の帳面に名を書きこめられるといふ。そして宮参りの方は、近年行はれるやうになつたのだと、考へてゐる向もある。大野では、昔、宮のお籠りが濟むと、その足で草鞋をはいてお寺参りに行つた。能生谷。磯部でも、寺参りは宮参りと一緒である。今井では、老人達の方は、佛を置く村の道場に参る。所が、お寺参りへの参詣を急がぬ所も少くない。

アサイワイ　お朝日の朝祝は、宮参り後お雑煮が全数である。能生谷には、白粥の中へ餅を入れたものを、朝食とする所もある。同じ所では、神マカナイは朝晩二回だといふが、人間も亦朝晩二食の所は少くない。磯部の奥では、夕食は手打蕎麥を例とした。

ハガタメ　能生谷では、新しい火で豆餅を焼き、焦した昆布と共に神佛に供へ、下げて更に串柿を添へて食ひ、それから宮参りに行く。是を齒固メといつてゐる。上路では若水でお茶をのみ、齒固メとしては、栗とか串柿とかを食ふといつた。

カイレイ　廻禮なごみ漢語で厳しく呼んだり、年始マワリとあつさり言つたりする。親類・家内・棟内。知己を廻るのが一般で、挨拶も雙方共「明けましてお目出度うございます。昨年中は御厄介になりました。又本年も相變らずお願ひ致します」といひ、辭する時には「さあ、是でおいとま致します。また春長にお目にかゝります」と、判で押したやうに言ふのである。昔は部落内残らず廻つたものであるが、今は小學校や區長の宅なきで、合同年始をする所も多い。糸魚川字蓮臺寺は、昔伊勢神領であつたが、その代官世木さんへは、部落の重立は、野菜を持つて年始に行き、世木さんは早朝「もの申す」といつて、年始に村を通つた。此時村人は大急ぎで出て土下座をし、もし遅れると閉門の憂目をみたといふ。

オンナノネンシ　正月二日になるが、小瀧では、女衆ノ年始といつて、親類知己を女が年始に廻る。所がそこでは同じ日に、本家へ分家の主婦達がお祝に上つて、お雑煮や甘酒の御馳走になる方を、正月禮とよんで區別してゐる。

テラネンシ　糸魚川ではオ寺ノ年始といふものは、正月二日であつた。「××寺御年始」なきと言つて、立春大吉の札をもつて、檀家を訪ふ所も、他にはあつた。磯部の仙納では、正月八日で、お伴が「××寺御年始」と、前布合をすること、主人はうるたへて、茶の間の縁側に、産を敷く。するともう一人お伴をつれて僧が入つて来る。年頭の辭を述べ、鏡餅に杉箸を添へたものを年玉といつて置いて行くのである。是を筒石では、正月五日でカドイリといつた。

レイヨケ　能生谷では、死人の忌のあけぬ間は、家の入口の道に、竹を十文字に交叉して、正月の禮除とした。同じ村で、大晦日に入口に垣を作つて、元旦には郵便配達が、それを破つて

入ると、報告されて居るのは、この禮除かぎうか明瞭でない。

ネンシサケ 年始廻りをする時、小瀧では、手拭・足袋なきを差出し、受ける方では必ず酒を出す。是を上早川では年始酒、根知では單に年始を出すなきと言つた。昔は糸魚川の字蓮臺寺では濁酒にごり酒の飲まれあひであつた。肴には上早川では、數の子・牛蒡ごぼうと干鰯ほしかを煮附けたピンピラ・干大根の醬油づけ。煮豆なきが、古例であつたといふ。

ネンシヨビ 正月中には親類間の招合ひがある。能生谷では年始招び、四海では春寄合、下早川では初オトキだいらの口祝くちがらといつた。この馳走には、長く續くやうにと蕎麥が出た。

ツモン 能生谷では、廻禮客に、お茶とおツモンの串柿を出すといふ。仙納では、大晦日の年取後招んだ子供に、やはり串柿を十づ、與へ、是をツモンといつた。下早川では、早朝新しい火で焼いた一つの豆餅を、家中でづまんで食ひ、物ツミと言つた。糸魚川でクイツメといふのは、三寶に白米二升を入れ、榎・勝栗・黑豆・串柿・橙々をのせ、その上に組子を立て、松を飾つたものである。是を作る某家では、四日の晩神前から下げて、五日の晩食べる。是等でわかるやうに、ツモンは食撮くひつみ物ものであらう。

カキモライ 元日の朝、村の子供が家を廻つて「柿貰かきイに來たアゼ」といつて、串柿を一つづ

つ貰ふ風は、名立谷の濁澤にあつた。

ホウツキ 才朔日に食ふ物に、濁澤では、赤い酸漿があつた。是を食つておけば、その年は腫物が出來ないと信ぜられて居る。

五 仕事始め

シゴトハジメ 正月二日の早朝に、仕事始めと言つて、各々其の職業の仕事を少しばかりするのは、一般の風である。上早川では、特に鍛冶屋や大工は、出来上つた仕事に、神酒を供へて祝ふ。大和川の漁師は、漁繩を縛ひ、網をすく。

ソメ 仕事始めを仕初といふ所も多い。藁仕事なき主である。磯部では、馬の杵をかいて神棚に供へ、今井では、草鞋・草履なきも作つた。

ナイソメ 仕初に繩を縛ふ所は多い。下早川の高谷根では、五十尋だけ繩を縛うて、神棚に上げ、秋米俵の縛り始めに用ゐる。上路・西海・名立谷でも、長さは決つてゐないが、同様であつた。此の繩を用ゐると、高谷根では、何かに食はれんと言ひ、名立谷では、細く長く續いて、俵のがあるので言つた。糸魚川には稻スガイを縛ふ所もある。上路では昔は錢ザシをも縛うた。ウミソメ 女が麻糸のウミ初をする所も多い。或は針を持つての縫初、綿糸のトリ初なきもあつた。上路では、袋を作つて、オ松サンに飾り、後に齋米ときまいを入れて、お寺へやるこいつた。

ウスノヒキソメ 能生谷で、臼ノ挽初といふ日は、少し遅く十一日であつた。この日初めて石臼で米の粉を作り、三角形の餅を拵へ、小豆粥の中に入れて神佛に供へる。

デソメ 消防組の出初なきと言ふ事も、近來は各村にあつたが、糸魚川では、漁の出初をした。此時舟をアキノ方に向つて出した。浦本の出初は、具足と言つても、漁の前掛位の物であらうが、それと被物とを、カコにこらせて、力いつばいアキノ方に漕がせ、船頭のやめの合圖で、目出度うを言ひ交して、それから漁場へむかふ。歸つて親方の家で祝ふ。又出る時、一升糺にフクデ餅二つを入れ、御神酒と共に、舟の艫に飾つてから下げて戴き、舟を出す家も、同じ所にある。

シヨウバイハジメ 小瀧の店やでは、商賣始めと言つて、品物をまけたり、景品をつけたりする。是は全般的で、店では賣初、客は買初といふ。青海では、第一番の客には、店飾りの大福出餅を與へる店もある。根知には、女の客が第一番だと、運がよいと言ふ店もあつた。能生谷でも第一客には、一ノ筆と言つて賞品を多く出した。

カキノソメ 子供の書初は全般で、親類・知己に配り、十五日の賽ノ神に燃やし、高く上るのを見て手が上ると喜ぶ。

ハツゴエ 下早川では、元朝の鳥の鳴聲を、初聲といつて、その方向により、其年の米や綿の値を占うたとも言ふ。さういふ仕方かは報告されてゐない。

ハツユメ 上路の荒澤では、初夢をみる爲に、明るいうちに寝ると言つた。青海の橋立では「正月二日の朝夢」といつて、吉相のえゝ夢を見ると、運がよいと言つた。良い夢は「一ふじ、二たか、三なすび」と言ふのが普通であるが、名立谷の濁澤では「四ぞうり」と言つた。是は死葬禮の夢もよいと言ふのである。同じ所でよい夢をみる爲には、「ほのぼのどあかしの浦の……」といふ歌を歌つて寝るとよいと言つた。悪い夢をみた時には、上路・名立谷・下早川では、二日の朝「天竺のバクにくれる」と言ふと、良くなると言つた。又朝の中に人に話してしまへば、抜かつて行くと思つて居るのは、青海・名立谷にあつた。

六 松 の 内

マツオサメ 正月七日の朝ギリをもつて、松納とする所は、根知・小瀧・下早川・青海・上路等である。上路では、大きな松だけ納めて、後の松は焼くまで納めない。下早川の高谷根では、松を皆集めて、中にヤスノゴケ二つをしばり、其中に餅と串柿とお洗米を入れ、全體を三所しばつて、アキノ方の木に納めておき、十五日に焼くと言ふ。

マツオロシ 西海もやはり七日の朝ギ、松下シをするが、糸魚川では、焼く日の十五日に下す家も多いと言ふ。

ムイカマツ 一日前の六日に松を下げて、六日松と言ふ所は、大和川の字田伏である。こゝでは子供達が三組に別れて、競争で松と錢を貰ひ集め、十五日の日迄、互に盗まれぬやうに番をする。青海でもやはり子供達は、六日の夜半を過ぎて、七日の朝になると、二組で松の高を競争し、此の一週間の間に、相手の松の隠してある所をかぎつけて襲ひ、大喧嘩を起す事もある。

マツナガシ 六日より早く、名立町では、松を五日に下げ申して、海へ納めるが、ネツイ家

では七日である。海岸の村の歌外波でも、五日に下して、川へ流すといった。磯部の仙納では、また早く四日に下して、川へ流し、御松流シと言つてゐる。小瀧でも四日である。こゝでは一つ頃、下した御松様を、氏神様の境内へ納める事にしたが、やばしくなるので、また昔のやうに、賽ノ神で燃やす事にした。

ミツカマツ 大和川の田伏では、六日に下げるのが正式で、三日に下げる三日松は、簡略だといふ。能生谷では、三日松か七日松にして、ごちらがよいとも言はなかつた。宇柱道では、今は三日だが、昔は二十日迄おいたと言ふ。糸魚川の一部でも、三日たてば下し、家の前に立て、置く家もあると言ふ。西海も三日である。

カガミナオシ 糸魚川の一部では、正月四日の晩を、鏡直シと言ひ、此晩お供へ餅を下して、翌日お雑煮にする。

サンガニチ 才朔日・二日正月・三日正月を合せて、三ケ日と言ひ、此の三日間には、色々共通な作法がある。若水を汲み、新火を焚き、雑煮を祝ふ事等は。言ふまでもない。今井・根知・上早川では、掃出すと言ふのは悪いからとて、箒も持たない。名立谷字濁澤では、此間に、地につる自分の姿に、頭が無かつたり、肩が無くすつぱりして居たりすると、其年の中に死ぬ、と

怖れられて居る。

タカノカミ 能生谷・根知では、薪も暮の中に下しておいて、三ケ日はタカへ上つてはならぬと言ふ。タカとは薪なごを蓄へておく二階の事で、能生谷では、正月二日の日だけは、一家の主婦が、タカノ神様に御馳走を供へて來ると言ふ。濁澤の話であるが、ヤゴメの婆さんが、獨りタカに居たら、鬼が梯子をのぼつて來た。所が、梯子のミリミリと軋む音を聞いて、梯子が折れるのだと思つて、鬼は逃げたと言ふ。だから正月十五日には、栗か榎のやうに、音のする物を食べ。下早川では、正月ツナギ栗を食ふのは、くり廻しの良い様にと言ふ爲であつた。

ミツカゾロ 三ケ日の間、神様にまかなつた物をかためておいて、オジャにして又供へ、此のお下りを、年男だけが食ふ風は、能生谷にあつた。是を三日ゾロと言つた。オジャもゾロも共に雑炊の事である。尙そこでは、七日迄粗は使はず、切る物はすべて大晦日迄に切つておくのである。名立町では、三ケ日の物を、四日の日にオジャにして食ふ。

オオトシノメシ 名立谷字濁澤では、大年に神に上げた御飯を残しておいて、七草のお粥の中に入れて、又神に供へる。能生谷では、大年ノ飯はどつておいて、粥にして食ふと、夏瘦や痘瘡を防ぎ、オコリを落す力があるといつた。

ハツヨリアイ 初寄合又は初集會といつて、字民の初會議を、今井では七日に開く。この席で一年間の村の事業や、人夫の賃錢を決めるのである。

フジヨウビ 不淨日といふ日は、まだ色々あるかと思ふが、根知では、正月三日を不淨日と言ふ所があつた。さうしてであるかは知り得なかつた。

タヨヒマチ 春になつて、神主の各戸を廻り祈禱する事を、下早川では太夫日待といふ。太夫サンは神主の事である。濁澤では、正月三日の晩、神主が來て、向ふむき五軒、こつちむき六軒の家で、祓をよみ、翌四日の朝ギ又來て、お勤をあげ、お札をくれるのを、單にオ日待といつた。上路では、正月七日の晩で、村の男は皆米三合を持つて宿に集り、太陽サンの掛字をかけて夜の明けるまで、酒を飲むといふ。酒一升宛を厄年の者が出した。この御日待では、絶対に女の手を借りず、宿でも女を他家へやると言ふ。

テラヒマチ 木浦では、單に御日待と言へば、正月六日の晩、太夫サンから御祈禱をしてもらひ、夜を明かす事であるが、別に寺日待と言ふものもある。此方は、正月三日に、同行中が寺に寄つて夜を明かし、四日の朝、三寶荒神や厄神除の札をもらつて歸る事である。下早川の寺日待も、寺に集つて、テントサン即ち日天様の掛字を掛けてした。市振では、二月七日にやはり寺

へ集り御日待をする。やり方は神式で、八百萬神を勧請して、經を読むのであるが、會衆は南蠻入の大根味噌を、睡氣さましになめく夜を明かす。翌八日は早朝に神札を貰つて歸り、一年の災難除として家に張り一切魚に出ない。此日は必ず海が荒れるとして居る。

七 七 草 前 後

カミノトシコシ 浦本では、七草の前日正月六日の夜を、神ノ年越シと言ひ、御馳走をしたり氏神詣をしたりする。男の子等はお籠りをして、七日の早朝飾松を家々から集める。大和川には大晦日の方を、年ノ暮とか年ノ瀬とか言ひ、此の六日の夜を年越シと言つて、お松を下げる所もある。此様に年越しが何度もある事は、尋ねておかねばならぬ。

トシコシノヨ 隣の下早川でも、やはり六日の夜を年越シノ夜とよび、此夜はゴカイホメと言ふ貫ひ人が来て、餅を貰つて行く。同じ所の高谷根では、ゴカイホメは誤解で、コガイホメとよび、蠶飼を褒めに來るのだと言つた。福俵をほりこんで、物を貰つて行くのである。

ヨイゼツク 磯部の仙納では、正月六日の夜を、宵節供と言ふが、風呂にはいつて、身體を清める位の事しかしない。こゝでは三月節供なごの前夜も、やはり同様によばれてゐる。

ナナクサシヨウガツ 上早川には、七草正月と言ふ所もあるが、多くの所では、七日正月又は七草ですましておく。大和川では「七草お雑煮」根知・磯部では「七草雑煮餅」なごと言ふばか

りになつた。浦本では神棚の餅を下して、此日雑煮をする。仙納では、大晦日に寺の二十四日講のお講佛に供へておいた餅を、下げて小豆粥に入れる。そこでは七日の朝は、わるがみ悪神がはいるからと言つて四つ前には家の戸を開けない。

ナゾロ 此日食ふ物を、ナゾロと言ふ所は、上路と濁澤であつた。ゾロと言ふのは雑炊の事で菜雑炊の意味であらう。昔は七品入れたが、今は芹か菜をきざんで入れるだけである。上路では此朝、俎の上で芹をトントンときざみ、「七草ナゾロ、芹たゝき」と歌つた。下早川では、ゾウジの芹を叩く役は年男で、輪火箸と搗粉木で、七・五・三に叩き、次の歌をうたふ。能生谷も同じで、歌の終にはドンドンと太鼓を打つたといふ。

唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に

わりや何叩く、七草なづなの芹きざむ

セツクハジメ 能生谷では、七草又は節供始メともよばれてゐる。即ち五節供と言ふのは、正月七日・三月三日・五月五日・七月七日・九月九日のことで、昔は大安であつたと言ふ。次の様な由來談も報せられてゐるが、是は昔の書物にあるものと大同小異である。

支那の楚國の孝子大周が、百歳の兩親の若返りを、二十一日間神に祈つて、帝釋天から七草の

法を授つた。そこで正月六日の夕方から、七草を柳の俎にのせ、椿の枝で「七草なづな、唐土の鳥が日本の國へ渡らぬ先に、七草なづなの芹を叩く、ドドンドン」と囃しながら叩き、七日の朝日の昇らぬ中に、東の井戸から若水を汲んで煎じて飲ませた。此の七草を、地球の南端にゐる白鳥は春毎に食うて、八千年も長生したといふ。又七草囃といひ、七草を俎の上にのせ、庖丁・火箸・搗粉木・杓子・銅杓子・菜箸・釜蓋の七つ道具をもせ、やはり「唐土の鳥が日本の土地に渡らぬ先に、なづな七草はやして」のやうにも言つた。唐土の鳥とは、鬼車鳥といふもので、正月の夜を血の雫をたらして飛ぶが、その雫が子供の着物にかゝると、病氣になるのでそれを追ふ爲である。

此の由來の後の方は、次の様にも變つてゐる。唐土の鳥が日本へ渡つて來る時、羽の下から粉を落すが、それを食ふと魚が死に、其の魚を食ふ漁師も死ぬ。是を除けるには、七草の汁を手足の爪の間にすりこんでおき、七草の雜煮を食ふとよい。

モチナカサイ 七草以後の八日・九日・十日を餅中サイと言ひ、平常の通り仕事をすることは、根知の一老人の記憶であつた。西海では、何と言ふか報告されてゐないが、平常通り仕事をすることは、四日・五日・六日・八日・九日・十日・十二日・十三日であつた。下早川では正月四日が

仕事始メで今日から普通の通り仕事に取りかゝるのだと言ふ。

八 倉開と舟祝

クラビラキ 正月十一日を倉開と言ふのは全般的である。大晦日から此日まで、倉は絶対に開かない。能生谷では、倉ばかりでなく、財布も米の俵も、開いてはならぬとされた。西海では戸を開くと、福の神が逃げるからだと言ふ。倉に供へてあつたフクデ餅を下して、雑煮とする所も全般的である。能生谷では、小豆粥に此の餅を入れる。更に此の粥を納屋や倉の戸につけて来るのは、さういふ理由であるか明瞭でない。小瀧にはこの朝戸主なきが、御神酒を供へて、次の唱へ言をし、倉のフクデ餅を下げる。

- 一にや 俵を踏んまへて
- 二にや につこり笑うて
- 三にや 盃取りおいて
- 四にや 世の中よいやうネ
- 五つ 泉の湧くやうネ

六つ ・ 無ン病息災ネ
七つ 何事もないやうネ
八つ 屋敷を平げて
九つ コ倉をおつ立つて
十にや どうとうおさまつた

デイリハジメ 能生谷には、此日納屋の戸をはじめて開き、出入始メの祝と言つて、雑煮をする所もある。

チヨウメンイワイ 上・下早川では、商賣人は帳面祝と言ひ、新年度の諸帳簿を作り、御神酒を供へて祝ふ。下早川では、お得意へ通帳を配り、此日から貸賣をする。又帳祝ともいひ、大福帳をも作り、神棚に供へ、ホウトウ蕎麥と言ふ太い蕎麥を打つて祝ふ。

ハツイチ 下早川の新町では、此日初市が立つて賑ふと言ふ。

フナイワイ 糸魚川の漁師町では、正月十一日に舟祝をする。舟に神酒を供へ、字寺島では海は北だが、南を向いてお参りし、家の床間に、舟神さんの掛字をかけ、フクデを供へる。字寺町では、舟に神酒を上げ、舟のミヨシに向ひ、「おエベスさん」と言つて、酒をこぼす。それから

家で酒盛をし、次の様なマダラと言ふ唄、其他を歌ふが、淨瑠璃と謠曲とは忌まれて居る。名立町では、今も酒盛は盛大にするが、此日歌ふ別な歌を知つて居る者はないと言つた。

常にならすとヤアハイ

こよひはまるれ

おまい コイノサ

ご馳そに ごりよした

能生の辨財天

泊しまりから見れば

根から生えたか

浮島か

フネノトシトリ

磯部の筒石では、正月十日の方を、舟ノ年取又は舟靈様ノ年取と言ひ、夕方舟にお供へを上げて來、其晩は、舟の親方の家では、船頭とヘーノリとを招く。魚をはえなわを延繩する人を、ヘーノリと言ふのである。翌十一日を舟靈サンノオ祝、又は舟靈サンノオ正月と言つ

て、朝は雑煮を祝ひ、酒肴を持つて舟へ行き、海神や舟靈明神に献じて、お下りをいただく。家でも盛大に祝ふ。舟の親方の家では、晝前は來る五・六月に舟に乗込むカコを招いて御馳走し、敷金を出して豫約をする。晝過になると、今度は今迄のカコを招いて酒盛をするのである。

フナダマサン

歌外波の字歌には、大網の家が昔は三軒あつた。大網とは鯛やフクラゲをこる網元の事である。五十軒ばかりの此の部落は、其のいづれかの出入であつた。正月十一日には大網の家では、舟靈様の家をし、出入の者はノリツケ着物で、「お目出度うござんす。お招ばれに來やした」と言つて、男も女も子供も押しかけて行く。

此の早朝、若者二人が御神酒樽と大きなフクデ餅を一重持つて、裸で濱の船小屋へ行く。先づ海の潮を浴びてから、舟のトモにフクデと神酒を供へ、船の後からお参りをし、御神酒を舟のトモにヘサキとドウノ間にたらしめて歸る。此のフクデ餅を床間に飾り、後に出入の者に切つて配るのである。

酒盛は正座にトモトリ(船頭)と潮見しおみを据ゑて盛になる。女共は下座に坐つて、小豆粥を御馳走になり、下つて寶引をした。その中各大網の酔つばらひが往來出入して、酒の飲高の競争をする。多く飲むのは、豊漁の前祝となるのである。此の酒盛には、次のノトヤマブシや石場カチノ

歌を歌ふ。

ノトヤマブシは ヤーイ

腰にナー つけたる

ホラの貝

市振でも、親方の家に、カコ一同が招かれて、舟靈祭の酒盛は盛大に行はれる。床間には、石船や寶船の掛軸をかける。今井の海岸では、床間に漁師の道具を飾り、お供へをして、舟の神様を祀る酒盛をする。青海の字田海では、船に神酒供物をして船神を祀る。

フナダママツリ

舟靈様といつて、舟靈祭をする風は、浦本では更に丁寧であつた。十一日の

未明に、新しい吠にフクデの一日餅を入れ、酒一升を持って舟へ行くが、途中で人に會ふと運が悪いと言つてきらひ、女になぎ會へば何度でも出直す。舟神は女神だから、灯をつけてはならんと言ひ、暗闇でホクソの所に、餅と酒とを供へる。ホクソはウケツツと共に、帆柱を支へるもので、船神の居る所として居る。其上大根二本を吠に入れて行く家もある。神酒を舟に少ししたらし、魚を少しづつミドツて飾り、オタツバイする。其後リョウゴン様にとて、神酒と線香とを海邊に飾る。此のフクデは後に大舟小舟の餅に添へて、親類や乗合の者に配る。四角の小さい

豆餅を、大きな白餅を重ねて、新しい薬でしばつたものを、大舟小舟と言ふのである。

夕方になると、船頭の家へ、カコが招かれて來、舟靈大明神の掛字を床間に飾つて、酒盛がはじまる。此の御馳走には、リョウゴン様が嫌ひだからと言つて、酔のものはつけない。祝の最中に、他の舟方ふながたが三組、老人組、青年組、子供組が、各トモ綱を持って、押しかけて來る。「船あげる手傳に來た、ドットコセ」と言つて上り、ジョウヤ柱（大黒柱）に、帆の前垂をまき、綱をしぼる。船頭が「ヨーセイヨーセイと言ふと、エンヤーエンヤーと、船を濱に引上げる場面をする。終ると「上つた、上つた、お目出度う」といひ、酒を十分に飲ませる。

九 若木迎と小年

ワカギムカエ

若木迎は大部分正月十一日に行はれる。下早川の高谷根と小瀧とは、もつと早く七草の翌日になつてゐる。下早川ではアキノ山へ行き、アキノ方に向いて、若木を伐りはじめるが、此時串柿・豆餅・白餅の細く切つたものを、紙に包んで上げる。同じ所には、オセンマイと餅とを紙に包み、アキノ方に下げてから、若木を伐る風もある。大和川では、オセンマイを撒いてから、アキノ方から鎌を入れる。根知では、若木を伐つた切口に、餅を据ゑて來るといふ。

ワカギ

若木として迎へられる木は、次の如きもので、神聖な木として、ごんなものが愛せられてゐるかゞよくわかる。一人で幾種類も伐つて來るのは、それ／＼用途が異なるのである。

〔ハナノ木又はモミヂノ木〕上早川・下早川・能生谷・今井

〔桂〕下早川

〔ジシヤガラ〕浦本・大和川

〔檜〕大和川・西海

〔ウツギ〕大和川

〔樅ノ木〕小瀧・下早川・木浦

〔スルデ又はカツノ木〕能生谷・木浦・下早川・西海

〔イツキノ木〕仙納

〔シデノ木〕今井・西海

〔ミヅクサ〕名立谷・能生谷・西海・根知・小瀧

〔アカメノ木〕名立町

〔栗〕名立谷

〔ネムノ木〕名立町

〔クロモヂ〕能生谷

〔クルミ〕下早川・根知・上路

〔ヨノミノ木〕浦本

〔樺〕小瀧

ハツヤマ 仙納・濁澤で初山と言ふのは、やはり正月十一日で、若木迎と同日同様である。濁

澤では、神酒・餅・柿・ハナイレを、伐る木の根に供へる。其年の木の伐りはじめで、甚だ嚴肅であるが、伐るのは繭玉の木であつた。ハナイレと言ふのは、御洗米の事である。仙納では、初山にお腹を空かすと、年中お腹が空くからと、朝飯をうんと仕入れて出かける。

ヤマイリ 名立谷の奥で、山入りと言ふのは、日は報告に漏れて居るが、若木迎と同じ様で、昔は誰の山で伐つてもよかつたと言ふ。同じ谷には、春になつて初めて山へ出た時には、お正月の固餅かたもちを食べる風があつて、是を初山ノ固餅かたもちと言つてゐる。仙納の方では、春初めて山へ出るのを、山へ年始に行くと言ひ、田の用水のかけ小口や、田の水戸に、一枚々々神酒をあげると言つた。山と言ふのは、山林ばかりでなく、田畑の事をも言ふのである。

ワカモチ 小正月にまた餅を搗いて、是を若餅と言ふ所は多い。濁澤では、繭玉なごも、此の餅で昔は作つた。高谷根では、今度はフクデ餅は作らず、大正月よりは簡略であつた。濁澤では若餅でやはりお飾りをつくり、今度はお飾りの上に蜜柑は載せず、十八日に下した。

ジウヨツカトシコシ 正月十四日の小年取を、磯部の奥では、十四日年越シといつた。此夜若木の火で、十五日の小豆粥の用意をして置く所が多い。西海では、こ宵もやはり大晦日と同じに、氏神にお籠りをし、大戸の戸も一晩中開けて置き、福の神を迎へると言ふ。浦本でも、此

晩と十五日早朝に、氏神参拜をするのは、大晦日と全く同じである。小瀧で此夜を年取直シと言ふのは、大正月に一度年取をしたのに、又するからであると言ふ。

ワカキタキ 西海の字釜澤で、若木焚キといふのは、正月十五日夜、所謂繭玉ノ木をもう下して、焚く事であつた。然し、多くの所は、繭玉は十八日以後に下すので、十四日の夜焚く若木は別に用意せられる。若木の火にあたると若くなると言ふ所は、今井・大和川・下早川・浦本・名立町等に多い。名立町では「若くなるぞ、若くなるぞ」と言ひながらあたる。下早川では、生木を焚くのは、煙で貧乏の神を追出す爲であると言ふ。又浦本では、屋根裏の明るくなるまでも、ヨノミノ木やジシャガラを焚く。西海の大火は、もう普通の薪であると言ふ。上早川では、出入の者から家内中、大圍爐裏を圍んで、山の如くハナノ木を積んで大火を焚いた。是等は大晦日の大火と、十五日の賽ノ神の大火等と共に考へねばならぬものである。

一〇 繭玉・稻穂等

マイダマ 若木に小正月繭玉をつけて飾る風は全般的である。大判、小判、チヨボ養なぎ、縁起のよい物を下げるのも、やはり一般であるが、若木で作った百姓道具を下げる所もある。繭玉をつけてマユダマノ木と言はれるのは、ハナノ木・ミヅクサ・シデノ木・樺等である。仙納ではイツチキノ木に、一白位も繭玉を作つてつけるが、オエの三間の間にいつばいになる程の大きなもので、十五日からの小正月休には、お互に訪問しあうて、繭玉の木を批評すると言ふ。繭の形にした繭玉を、七・五・三になるやうにならせるものなどは、下早川で聞いた。繭玉をつくるのは、能生谷では、ハナとも豊作を祝ふ爲だとも言ふ。そこでは繭玉を親方の家へ持つて行き、神佛に供へ、直ぐ持つて歸る所もある。根知にはマイダマと言ふ所もある。

マユカキ 皆十五日か前夜に、繭玉の木を起して立てるが、倒すのは十八日の所も、二十日の所もあり、大和川では次の月の半頃までも置くとも言ふ。糸魚川は二十日の日迄で、繭掻キと言つた。濁澤では、十八日に下す事を、繭モギと言つて居る。同じ所では、繭玉をつけるのは、次

の由来だと説明してゐる。人間が小さくて、下駄の齒の下に、千人もはいつて居つた時、木になつて居た餅を、拾つては食うて居た因縁である。

マイネリ 繭玉は多くは二十日に下して食ふが、根知・下早川では十八日だと言ふ。食べ方の多くは、小豆粥の中に繭玉を入れて煮るのであるが、是を根知・能生谷・下早川では、繭練りと言つて居る。下早川では此の粥には、十五日ノ粥を残して置くと言ふ。

イネノハナ 若木に細い餅をつける方を、稻ノ花とよぶ所は、下早川・根知・小瀧である。西海では稻ノ花とは言はず、餅も梅の花形にしてつける。米ノ花と言ふのは上路で、餅ではなかつた。胡桃の木を二尺位に切つて皮をむき、大きな削りかけを、三段位垂れさせたもので、稻が穂を垂れた様に見える。

アワボ 下早川の高谷根と上路では、粟穂と言ふものも作る。高谷根の方は、栗の木の枝先に白い胡桃の木をつけ、垂れさせたものである。上路でも似て居て、黄色い肌のキツダノ木を切つて、栗の枝なぎに挿したもので、栗穂がみのつて、ぶらりと垂下つた様にするのである。糸魚川では、粟穂はもう飾らないらしいが、十八日の日を粟刈と言つてゐる。

サク 西海でサクと言ふものは、カツノ木を一尺位に切つて、皮をむき、器用な者は、花の形

にした飾をつけること、報告されてゐるが、上路の米ノ花と同じ様なものであらう。神棚に飾り其年の作を祈ると言ふ。サクは作で、田畑の作物を意味するに違ひない。

イネカリ 根知・小瀧では、十九日か二十日に、稻ノ花を下す事を、稻刈と言つてゐる。下早川の高谷根では、十八日に粟穂も稻ノ花も下すが、是を稻扱と言つて居る。是に用ゐた木を焚物にして味噌を煮るとくるはんと言ふ。

一 一 十 三 月

○ **ガヤノキ** 小瀧では、若木迎へに、榎ノ木も迎へて来て、神様に上げる所もあると言ふが、名立谷の濁澤では、正月十五日に窓々へ立てる。そこでは鬼がはいらうと覗くと、目を突く爲だと説明して居る。二十日にお粥を煮る時下してくべて、足や顔や手をあぶる。トンビートンビートえらい音がするものだが、かうすると蚊に食はれないと信じ、是を蚊ノ口焼キと言つて居る。

○ **ジウニガツ** 小瀧の夏中では、榎の木を稻ノ葉といひ、根本を割つて、それに小さな札をはさんで窓口に出す。札には舊曆で十三月ある時は十二月、十二月の時は十三月と書いた。鬼が来て不思議に思つて傍へよると、目を突かせる爲であると言ふ。

○ **ヤクヨケ** 下早川かみいでの上出では、胡桃の若ウズを五寸程に切り、二つに割つて、榎の葉をはさみ閏年には十二月、平年には十三月と書いた紙をつるし、新しい藁で結へて、大戸先や神棚に供へる。異國の神鬼を寄せぬ爲の厄除ケで、やはりそばへ寄ると、鬼の目を突くのだと言つた。同じ所の高谷根では、刺だらけの總ノ木トウに、同じく十二月・十三月と書き、榎の木をはさんで窓へば

かり出すと言ふ。

○ ジウサンガツ 下早川の育郷では、榎ノ木を割つて、いつも十三月とばかり書き、榎の實の方をつけて、お参りすると言ふ。神棚へ供へる意味であらう。能生町では、正月十四日になると、十三月と書いた榎に、葉をつけて、ガンダに出して置く。其奥の能生谷でも、昔は附木に十三月と書き、榎の枝をつけて入口にはつたと言ふ。借金取が來ても、十三月とあるのを見て、十二月の間違だらう、よく確めようとそばへより、目を突かれて逃げると言ふ。

○ オニハライ 大和川では榎の木に、十三月とばかり書いたものを、鬼拂ヒと言ふ。赤鬼青鬼が掛集めに來るが、一月遅れたと、此處ではあつさり逃げるからだと言ふ。所が、濁澤では彌彦の彌三郎婆サは、十三月あると出て人を食ふから、十二月とばかり書くと言つたが、實際は行つて居ない。誠に十三月の年は婆サが出るから、色々不思議があると言つた。

○ ヤクジンヨケ 木浦では十三月とだけ書いた、四寸ばかりのヌリダノ木に、藁スベで榎の葉をしぼり、窓々にさす。是を厄神除ケと言ひ、正月十四日に挿し、十日に下してくべる。能生谷の柱道はしらみちでも、厄除ノ木と言ひ、門口に出すが、作法は同様であるらしい。

一一一 祝箸・嫁祝・木責

ハナバシ 能生谷では、若木のカツノ木で、花箸を作り、十四日の晩から神にも供へ、家人も使ふ。この箸は、上方に削り屑を残したもので、神に供へたものは、翌年箸焼キに用ゐるのである。木浦では、カツノ木をヌイダ又はデクノ木といふ外、全部能生谷と同じである。デクノ木とは、養ノ神の木偶でくを作る木だから、言ふのであらう。

テズリバシ 上路では、正月十五日の小豆粥を食ふ箸は、若木のカツキで、一尺五寸もの長さであつた。此の箸が短いと、ハナトリザワが短くていかんと言ふ。ハナトリザワと言ふのは田の代掻に、馬の口につける取棹の意味である。神に供へたものは、やはり十二ヶ月の天氣をたえずに用ゐる事は他と同様である。たゞ此處の箸には、上から三片五片七片の、規則正しい削リ花をつけてある事が、特徴である。下早川では桂の若木で作し、上の片側に少しばかり削りかけを残しておくが、この箸ノ花を、稻ノ花とよぶ所もあると言ふ。上早川の舊家で、主人だけが、大正月の三日間用ゐる、削リ掛ケノ太箸と言ふのも、是等に似たものであらう。

クリノキバシ 大和川では、栗の木の新ウツを伐つて来て箸を作り、大年と三ヶ日の間、是を用ゐる。若ウツは今年新しく伸びた若枝の事である。栗ノ木箸を用ゐると、一年の縁廻しがよくなるからだと言明されてゐる。神様にも此の箸を供へるが、オ夷^{イヌ}サンの栗ノ木箸は、特別待遇で沖へ漁に出る時は借りて行つて、今度は自分達の飯箸にする。みんな御利益があるかは聞漏らした。尙そこではオ松サンにまで、箸ではないが、栗の木の若ウツを添へると言ふ。根知でも、栗の木の箸を用ゐるが、此方は、正月十五日のお汁粉を食ふのであつた。名立谷の奥では、若木の栗の木を、十四日に皮をむいて、カギをつけて、なげしに掛け、人の財産をくりぬくと言ふがそんなものか明瞭でない。

ヨメイワイ 上早川では、正月三ヶ日の間に男の子供達が、カツノ木で作つた刀を持つて行つて、新嫁の尻を「祝ひましょ」と叩くのを嫁祝といふ。是は嫁に達者の子を産めといふ意味で、其の家では子供に祝儀をくれる。同じ村には、もう刀を持たずに、しかも正月十五日に、子供の嫁祝が行はれる部落もある。早朝「××の者、嫁祝に來たぜ」「おう、よう來てくれた」と言ふわけで、少々の錢を與へる。

ヨメタタキボウ 下早川では、若木の桂で作つた刀を、嫁叩キ棒と言ふ。鐔を上下から削つた屑を残して作るので、正月十五日に、是をもつて嫁の尻を叩き、早く賣家へ歸れとか、孕め孕めとか言つて、祝儀を貰つた。新婚の家へまでも行つたと言ふ。

カミモライ 名立谷の濁澤では、正月十五日の朝、新嫁新婚の家へ、若木のヌルデの刀を持つて、嫁さんの尻はたきに行つた。「祝ひませう」と言ふのに、はたかれんど、子供が出来ないと、言つた。是を紙費といひ、其の家では、子供一人に白紙二枚づつくれた。能生谷でも、紙や筆を貰ひに、新嫁の家へ行つたと言ふが、此方は正月二日の朝、しかも夜の十二時を過ぎると直ぐ行つた。早い者程多く貰はれたからである。尙こゝでは、昨年中に嫁を貰つた男が、元日の宮参りに行くど、待ちぶせて胴上げをしたと言ふが、此方は若連中の受持であるらしい。

オモケモケ 糸魚川の水崎で、オモケモケと言ふのは、男の子がカツノ木で刀を作り、女の子を追ひまはす事であつた。此時次の様な歌を歌ふと言ふが、多分賽ノ神の事ではないかと思ふ。

オモケモケモケ

大なら男十三人

女の子ならふみつぶせ

行事の名も、歌の初の言葉で言ふのであるが、オモケモケはおもしろけもち大儲儲の意味であらうか。さて方々に賽ノ神や鳥追に、子供に若木で刀を作つて與へる所があるが、是は嫁叩き棒が本來の姿であつたかも知れない。

キイチメ　なりものの木をいぢめて、正月十五日の小豆粥をくれる風は、全般的であつたが今は餘り行はれて居ないらしい。然し、仙納では、さうするとなりがい、人の言ふ事をよくきくものだと、まだ信じて居る。いちめられる木も、柿が大部分で、まれに梨、栗なごにする位が、一般的である。小瀧では二人行つて、木の傍で次の様な問答をする。

「なるか、ならんか」

「ならん、ならん」

「ならにや、切るぞ」

と言つて、鉈で傷をつけると、

「痛い痛い、なるなる」

と言ふ。そこで粥を傷口に與へる。何處でも大體こんな方式であつた。上早川では是をナリモ、祭と言ふ所もある。

一三 田植正月

ナリワイ　若木で正月十四日に、小さな百姓道具を作る所は少くない。木浦では是をナリワイ

と言ひ、若木のカツノ木で、米俵・杵・臼・鍬・鎌等を作り神に供へる。ナリワイは言ふまでもなく、生業の日本語である。能生谷の奥では、百姓道具を餅で作つて神に供へる。下早川の上出

では、更に丁寧である。若木のカツノ木で、百姓道具としては、鍬・アラクレ用の萬鍬・後ナヲシ川のエグリ、祝用としては、餅臼・杵を作る。次に同じ木で、十糶位のシヨウダメとタチオドミを作り、紋を描いた内山紙の着物を着せる。それらを皆年神様の前に飾り、神酒と御飯ミを上げるのである。シヨウダメは早乙女、タチオドは田男の意味であると言ふ。

ナワシロ　根知・今井・西海では、十四日から十五日にかけて、爐をきれいに清め、子供にも足を爐の上にのべさせない。足を爐の上に出すと、此年は苗代へ鳥がはいるとか、鳥が荒らすとか言ふのである。糸魚川では、子供が足を火の上のべると、「ほほ、鳥がはいつた」と言つて追ふ。爐を苗代にかたきるのである。

ナワシロジメ 十四日の夜、翌朝の小豆粥を煮、是を苗代締メと今井では言ふ。其の粥が餘り硬いと、本當の苗代も硬くなるし、軟だとはり苗代も軟くなると言ふのである。

アラクリカキ 十四日の晩、夕食後爐で明日のお汁粉の小豆を煮るのが一般であるが、上早川では、昔此夜を田のアラクリカキといつて、鍋の中へ小さい木のマダワ即ち馬鍬を入れて、しきりにかきまはしたと言ふ。

シロカキ 糸魚川では、十五日の朝、杉の枝をコマザラゲとエブリの百姓道具にかたきり、それでしきりに粥をかきまはしてから食べた。西海では、此日を代掻と言ふ。下早川では、此の粥の方を代掻と言ひ、濃い粥だと良い代掻だとほめ、薄いと、代掻が悪いから、今年は稻の落着が悪いぞと言ひながら食ふ。そこでは、此の小豆粥を少し残しておいて、十八日に食ふ。上路では小豆粥がジルいと、代掻が延びると言ふ。ジルイとは薄いことで、延びると言ふのは、手廻しが遅くなることであらう。尙そこでは此日、厩から庭まで、馬を引出して、代掻の眞似をした。雪の深い所であるから、外へは出す事が出来ず、家の中の土間まで出すのである。根知では代掻と言ひ、馬を朝早く飼つた。飼ふとは飼料を與へる事である。

コエクバリ 根知には、十四日の夜を、肥料配リと言ふ所があつた。肥料配リは、代掻がすんで、田植に移る前に、堆肥や厩肥を田の中に配る事であるが、是にかたきつて、蕎麥を打つて食つたと言ふ。

アヅキガユ 十五日の朝は、お汁粉或は小豆粥と言ふやうに、小豆のはいつたものを食ふ風は全般的であるが、上路では、大正月から供へておいたオ節を、この日下げて、小豆粥に入れる。下早川では、此のお汁粉をマンカンと言ひ、鍬・鎌・熊手・馬鍬・エブリ等の百姓道具で、かきまはして食べるが、百姓道具の方はそのまま、神棚にあげる。今井では十五日の粥を少し残しておき、十八日の粥に入れる。

タウチ 正月十五日を、田打といふ所は多い。名立谷の濁澤では、ヌルデで作つた鍬柄・槌・田掻の道具等を、小豆粥に浮かせておいて食ふ。木浦では此の小豆粥は、百姓道具を割つた屑で焚き、一杯食ふ毎に、田を一枚打つた二枚打つたと、數へると言ふ。能生谷では、子分は皆親分の家に寄り、田打と言つて御馳走になる。名立谷では、此日をやはり田打と言つて、其年百姓の手傳をして貰ひたい人々を招き、雑煮を御馳走する。餅を澤山食べる人程、田打に働く人だと言ふので、オタチをする爲、とても賑かである。オタチは達つて食はせる事で、オシギリなきとも言はれる。オシギリは強ひる事で、無理に食はせるが、又一つの御馳走であつた。

ナエトリ 今井の虫川むしがわでは、正月十四日の晩を苗取とも言つた。苗取と言つても、苗取に使ふ繩を縛うて、十文字にしばつておくだけと言ふ。根知では、苗取とは言はぬのであるが、やはり繩を縛ふ。一年中使ふだけの、草まるけのスガイを縛ふのである。スガイとは、藁の穂の方を兩方から違へて結んだ繩である。

タウエ 正月十五日を、オ田植とよぶ所は、西海・上早川・下早川・糸魚川・橋立である。糸魚川では、オ田植は少し遅く、十七日にする所もある。上早川では、十四日に上げた神佛のお供へ餅を、もう今朝は下してお汁粉に入れる。西海では此日、馬に豆を食はせて優遇するといふ。**タノクサトリ** 糸魚川には、正月十五日の朝、家内を掃くと、田の草が生えて困ると言ふ所もある。又同じ所の水崎みづさきでは、十六日を田ノ草取だと言つて居る。

ヤブイリ 正月十五日・十六日をセチと言ひ、嫁婿の里へ行く事は、節日總稱の所に、まごめて記して置いたが、尙筒石では、是をヤブイリとも言ひ、嫁婿には、朝は雑煮、夕は饅頭の御馳走をすると言ふ。能生谷では此の十六日には、串餅を作る。カツギノ木の串に餅をさし、スリ味噌をつけて焼き、膳につかずに、圍爐裏を圍んで食ふのである。又此の兩日は、濁澤ではお釜の蓋をとり、平常伏せてばかり置く白をも起す。仙納でも、十五・十六日はお釜の蓋もとれると言

ひ、十五日から二十日迄も、お釜の蓋をあげてお供へをする。

ニラツミ 下早川では、十五日がお田植で、十六日はオエダ、即ち終田であつて、田植しまひと言ふが、多くの所では不思議にも、十六日には、小正月の行事である農作の事は、殆ど行はれないやうである。翌十七日になると、下早川の高谷根、糸魚川の水崎では、鳩積と言つて居る。又糸魚川には、此日をオ田植或はカチキと言つて、雑煮をする所もある。カチキは田へ入れる草の事で、それを刈る意味であらうか。そんな事をするか其の作法は、いづれも明瞭にされて居ない。翌十八日を糸魚川では野休と言ふ。野は田の事である。

一四 正月の占

クドマツリ 正月をもつて、一年の吉凶を占ふ作法は、大正月のヤスノゴキ・初夢、或は次項の小正月の賽ノ神等、相當あるが、それは各々の項に採録してある。こゝでは先づ木浦の日吉神社で行はれる、クド祭の方法をのべる。正月十四日の晩、火打石で新しい火を作り、五寸位の葦を三本入れて、粥を煮る。粥のつまつた葦を上げて、神前に供へておき、十五日の早朝割つて見る。三本の葦は、豫め稻の早生・中生・晩生に割當てられて居るので、粥の詰り具合で、参拜の各人が何分作かを判断するのである。何とよぶかわからぬが、上早川の民家でもやはり十四日の晩、小豆粥の中へ三本の葦を入れて煮る。この方の葦は、晩生が十五糎、中生が十一糎、早生が八糎位で、各々長さが違つてゐて、此中に入つた小豆の粒の多寡で、稻作の豊凶を占ふのである。

ツツガユ 下早川・名立谷では、此の方法をオ筒粥とよんでゐる。下早川の方は、三寸程の三本の葦を、ナツギに切つて、オ筒粥の中で煮、祝詞をあげる。ナツギは切口を斜に削ぐ事である。

る。米・小豆・豆の粥とみえて、米が多く詰つて居れば米作豊作、豆が少ければ豆作不作と言ふ風に、占ふと言ふが、是は少し明瞭でないであらう。名立谷濁澤の筒粥は、十四日の晩、村中お宮に籠つて行ふ。こゝでは粥に入れる葦は九本で、次の朝開くのである。昭和十四年正月の筒粥の結果は次のやうであつた。

記

一、六分	むぎ
一、七分	わせ
一、七分	中て
一、八分	をく
一、六分	へ
一、六分	粟
一、八分	大豆
一、七分	小豆
一、九分	そば

へと言ふのは稗の事である。是を各家では、居間にはつて、一年中眺めて居るのである。尙此處の筒粥については、「西頸城郡郷土誌稿第二輯」九十一頁を参照せられたい。

アヅキヤキ 正月十四日の夜、若木を焚き、十五日の粥を煮ながら、十二粒の小豆を、地爐じろの火の周におき、小豆の焼け方で、一年十二ヶ月の天氣を占ふのである。今井では、小豆の焼け方が赤いとテリ、じぶじぶすればフリ、ふうふう吹けば風、ほんど飛出せば大風と言ふ。西海・上早川では、赤ければテリ、黒こげはフリ、ふうふうとふくれると風と言ふ。大和川では、煮えただばかりの小豆を焼く。ふくれると風、焦げるとテリ、しぶくるとフリと見る。下早川の高谷根では、是を小豆焼きといひ、正月二日に行ひ、焼けて黒ければフリ、白ければテリ、ふけば風と言ふ。糸魚川では、寒中に行ひ、一粒づつ一月から火中に投じ、占ひ方は前同様であるが、小豆の帯が切れると、豊年だと言つた。下早川では、此の小豆焼きをし、小豆のとぶ方向によつて、婿や嫁を迎へる方向を占ふと言ふ。

ジウゴンチノカユ 能生谷の東谷内たにうちでは、正月十五日の小豆粥を、二十日迄残しておいて、硬くなつて居ると晴天年、水が溜つて居ると雨天年と考へたと言ふ。十五日の粥を、十八日頃迄残

しておく所はまだ他にもあつたが、何の意味であるかは説明されて居なかつた。

ハシヤキ 下早川の奥、高谷根で箸焼きと言ふ、一年の天氣を占ふ作法は、次の如きものであつた。先づ若木の胡桃の木で、箸を十二膳作り、正月十四日の晩小豆粥の中に入れて煮る。此の箸には、手に持つ方に、削り掛ケが少々残してある。是を粥から上げて、屑屋くずやの人タカまといつて三階になつて居る一番高い所の、サスにぶら下げて、一年間おくのである。是を十四日の晩爐にくべて、一膳の二本で、一ヶ月の前半後半の天氣を見る。赤ければ風、赤いオキに灰の衣がかゝれば晴、黒ければ雨、煙風が吹けば風荒、水が出れば大雨、煙が出れば曇と言ふ具合で、仲々よく當つたさうである。木浦・名立谷でも、若木のヌルデで十二本の箸を作り、一年間おいてから、天候を占ふ事なき、前と同様である。西海・上路では、其年の箸を用ゐるやうであるが、占ひ方等は前同様である。たゞ西海では、天氣の他に、箸の倒れる事によつて、作柄の豊凶をも見ると言ふ。

テンキダメシ 能生谷・濁澤でも、十二本の箸を、翌年の十四日に焼いて、天候を占ふのであるが、濁澤では是を天氣ダメシと言つて居り、能生谷では、焼ける音で占ふのが、他と異つて居る點である。即ちアツアツは雨、プウプウは風、ボウボウは晴といふ具合であつた。

○ カンダメシ 名立谷と青海の奥とでは、寒ダメシと言ひ、寒三十日を一年十二ヶ月に割りあてて二日半日を一ヶ月とし、順次に天氣を占うた。名立谷の方は、さうするか明瞭ではないが、青海の方では、寒の方の天氣が、ひきくしけると、それに當る月の方は晴と言ふやうに、アツペに考へると言つた。

一五 鳥追・土鼠追等

○ トリポイ 鳥追は大部分の所では、正月十五日の未明に行はれるが、能生谷の一部分、名立谷・磯部では、十四日の夕方から夜にかけて行はれて居る。能生谷の字鷺尾わしおでは、鳥追をする者は若者連中であるが、他では皆子供の領分になつて居る。鷺尾では、お宮から出て、村中を鳥を追うて廻り、お宮へ歸つて終るが、村の家々からは、餅・菓子・蜜柑などが贈られると言ふ。能生谷には、子供が十四日の夜から、氏神様に籠り、登早朝林中を練廻つて、鳥を追ふ所もある。又村境まで追ふ所もある。名立谷では、一軒々々を廻つて歩き、根知・今井・糸魚川などで、苗代田に行つて追ふ者もある。能生谷では、此日は天から、三石九升も穀物を食ふ、大喰ひの鳥が降りて來るのだが、地につけずに追返す爲だと言つて居る。磯部の奥では、鳥追をしなくなつてから、三十年にもなると言つたが、學校の先生にかこつけて居た。濁澤では、昔他村の眞似をして、鳥追をしたら、ノウカ鳥が作を食うたので、止めたのだと説明して居る。

○ トリポイウタ 鳥追には、大聲で歌を歌ふのがつきものである。報告によると、此の郡では大

別して、次の如く三つの型が、歌はれてゐるやうである。

苗代ナカシロのオウバアジヨ

鳥ヨ追うてくれやれ

何と言うて追ふいの

西から東へたつ鳥は

おんざりめんざりつんばくろ

はがひが十六目が一つ

ほうほらほい

此のオバジヨ型は、西部の根知・小瀧・今井・西海・糸魚川・下早川に於て、歌はれて居る。根知では、此の終に「××村へたつてけ、たつてけ」と、隣村へ追ふ所もある。小瀧では、終が「稗食ふ鳥ネ、粟食ふ鳥ネ、向への山へ、ほいやらほう」となつて居る。次は佐渡ヶ島型である。

おら前の早生わせべに

鳥がついたほういほい

追うてもたゝす

叩いてもたゝす

たゝすの鳥は

尻ヨ切つて頭切つて

小俵こたあちにつめて

牛つこにつけて

猫つこに引かして

猿つこにばはして

佐渡ヶ島へほういほい

佐渡ヶ島にセキがなきや

鬼が島にほういほい

此の佐渡ヶ島型は、下早川でも少し簡略に歌はれて居るが、多くは東部の能生谷・名立谷・磯部一帯に行はれて居る。初の早生稗を、今は早稲穂と思つて居る向が多い。又能生谷には、小俵を戸棚へとぶざけて唄つた所もあり、名立谷には「ゴンザプロへ拾ひ込んで」となつて居る所もある。

る。糸魚川では、佐渡ヶ島への所を、猿ガバンバへといつて居る。「尻切つて」よりも前の所が次の様に少しづつ異つて歌はれても居るのである。

鳥ほいだ鳥ほいだ

ダイラドン殿の鳥ほいだ（能生谷）

こりやまこの鳥ほいだ

ダイロドン殿の鳥ほいだ（磯部）

ありやまこの鳥追だ

ダイドン殿の鳥追だ

おら苗代に鳥が三羽おりて

追うてもたゝす

叩いてもたゝす

たゝすの鳥は（名立谷）

此の分類では、ダイラ殿がきまり文句であるが、是は蝸牛殿の意味かきうか、まだ明瞭でなかつた。磯部には、折衷型がもう一つ歌はれてゐる。次が其の全部である。

ほうほの鳥は

おんざりめんざりつんばくる

羽根が十六目が七つ

おら前めの早生べに

鳥がついたほうほ

第三の型は、筒石にあるもので、他人の家の入口の戸を、こんくくと叩いて、次の歌を歌ひ、逃げて来るのである。先を越されると、口惜しがる風があると言ふ。

××うはあい

團子三つ粉粥はえ三杯

粥の箸やねぶつても

鳥が 起きて追はへまい

ほうやほうや

××は其の家の屋號を入れるのである。

トリオイギネ

歌を大聲でさなるだけでは足りず、色々なもので盛に音をたてる。昔は磯部・能生谷等、太鼓を用いた所もあるが、今は石油罐や板切なぎに代った所が多い。上路では、割竹を用いた。能生谷には、神棚に上げた槌や棒で、板を叩いて、音を立てる所もあると言ふ。名立谷では、ヌルデの槌を特別作る。下早川でも、ヌルデをカツノ木と言つて、それで槌を作る。古い槌なら、新しい藁を巻いて用ゐる。根知では、正月の若木のミヅクサで作った、小さな槌を鳥追杵と言ひ是で板を叩く。

ムクロオイ

下早川の高谷根では、土鼠追をする。藁叩槌を縄でしばつて、引っぱりながら

ムクロ殿ドンそこにか

横槌へんまゐらせ

と言つて、畑に時々ぶつつけるのである。同じ地方には、次の様に言ふ所もある。

もぐら殿ドンナミこへ行つた

横槌をまへらつせう

そちら其處へ行つた

ほうら其處へ行つた

クチヤキ

今井の奥、菅沼部落では、十五日の粥を煮る下で、が櫃の葉を一枚づつくべながら、「蛇の口、蚊の口、虹の口」と唱へて、口焼キをすると言ふ。是等の害虫に食はれない禁呪である。濁澤でいふ蚊ノ口焼キは、正月二十日に、やはり櫃の葉を焚いてするが、唱へ言は忘れて居た。

ヘビヨケ

日はいつと定つて居ないが、高谷根では、春苗代に蒔いたスヂの残りをしらげて、米の方は味噌に入れ、ヌカは家のまはりに、

ヘイビもムカジも

そつちへ行け

と言つて撒く。是は蛇除ケ百足除ケである。

一六 塞の神

○ サイノカミ 正月十五の夜、塞ノ神と言つて、大火を焚く風は、全般的であつたが、今は行はれない所もある。所が、能生谷では、塞ノ神をしなくなつたら、御松様が何時迄も、川に引つかかつてゐて困つたと言ふ。塞ノ神のシンボクと言ふのは、神木か芯木か、決し難いが、兎に角塞ノ神の中心になる大木である。それは誰の山から伐つてもよかつた。選ばれる木は、雑木（上早川・下早川）栗（能生谷・西海）檜（根知）ミヅクサ（橋立）ハルノキ（下早川）松（今井・浦本）なぎであるが、根知では出来るだけ枝の廣がつた木をよいとした。火が燃盛ると、威勢よく聞くからだと言ふ。枝を縄で中央にしつかりしめて、藁・正月の松・縄・書初等をつける。能生谷には、孟宗竹をシンボクにし、書初を御幣の様に、頂上につける所もある。西海では、シンボクの竹は、厄年の者が出し、頂上には、書初を切つて幣束にしてつけるが、是をも塞ノ神と言つて居る。根知では、頂上に五色の紙で作つたオンビラを風になびかせる。オンビラは御幣の意味である。

○ コザイノカミ 大塞ノ神に對して、小塞ノ神、或は子供ノ塞ノ神と言ひ、傍に同様の小さいものを作り、此方を最初に焼く所も、根知・下早川にはある。是等の塞ノ神は、神様に供へるお花である。下早川では説明してゐる。又中に青竹を入れて、大きな音を立てさせて、喜ぶ風もある。

○ オマツサンワライ 海岸の部落である、名立町・能生町・大和川・西海では、多く正月の御松様ばかりか、藁を添へる位で、塞ノ神をすませる。山の中にある上路だけは、御松様笑イに行くと言つて、毎年山姥の祠の下で、お松ばかりを焼くと報告されて居る。

○ サイノカミノワラ 塞ノ神に焼く藁や松飾を集めるのは、どこでも子供の役目である。七日に下した松飾を、一週間小屋を作つて守つて居る風は、名立町にもあつたと言ふ。能生谷の柱道では、藁を集める爲に、次の歌を子供が聲はりあげて歌ふと言ふ。

塞ノ神の番神だ

藁もつて

みんな持つて

とんで来い来い

ドウロクジン 根知の字山寺では、昔道祿神と言ふ、男女の姿をした二體の人形を、塞ノ神へ持って行って焼いた。是は若木の胡桃の生木を削つて作ったもので、二尺位もある。此の焼残りを持歸つて、火事になつた家もあつたと言ふ。

デクサマ 能生谷では、木偶様と言ひ、男の子のある家では、男女二體づつ、カツノ木で作つて塞ノ神に焼く。餅を負はせてやると見えて、餅を火の中から拾うて食ふと、疱瘡が軽くすむと信じられて居た。西海では此の人形を塞ノ神と言つた。

オモリサン 下早川の高谷根でも、やはりカツノ木で作り、是を塞ノ神サンと言つたが、男の方をタヨサン、女の方を御守様と名づけて居る。タヨサンは太夫様で、神主の事である。此の神さん方は、正月十四日の晩一夜泊りであるから、御馳走を上げ、餅を負はせ、一把菜の中に二體一緒に入れて、塞ノ神の上にしぼる。焼けて落ちた餅を食ふと、夏瘦をせぬと言つた。同じ村には、薬で作り、紋のついた着物を着せて、同様にする部落もある。

サイノカミノボボ 浦本では、薬で作つて着物を着せた塞ノ神ノボボを、塞ノ神のシン松に飾る前に、子供は是を持つて錢を貰ひに歩く。

塞ノ神の勸進

錢も金もわくわく

一割二割

と、各家の戸口で歌ふ。もし金を出ししぶると、次の様に悪態をつくのである。

三割四割

吝嗇のお婆しわくそ おはは

ちやつちやと出しやれ

西海でも、全く同様の歌を歌ひながら、餅を貰つて歩く。西海の方は十五日であるが、浦本の方は正月七日の日で、塞ノ神が終ると、もう一度金を貰ひに歩く。今度は「いしやぎんぶき、やまがたか、やまがたの子供は……」と言ふ歌を歌つたが、終の方は忘れられてしまつた。

フクノカミ 同じ浦本にも、福ノ神とよんで、小さな人形を作り、着物を着せ、帽子をかぶせて柵に入れ、塞ノ神ノ勸進と言つて、錢を貰つて歩く部落もある。金を貰ふと、福ノ神を描いた紙をおいて行く。此方は十五日に行はれ、福ノ神の人形は夕方塞ノ神で焼く。

コシモン 下早川にも、十五日の朝、たゞ「塞ノ神の勸進、錢も金もわくわく」と言つて、子供が錢を貰ひ歩く風があるが、能生谷では、此時子供達は、木の刀を作つて貰つて、腰にさし

て行く。鐔の所は、柄と刀身との、兩方からの削り掛けで出来て居る。青海の橋立では、此の刀はフシノ木で、同様に作るが、柄の所が人形の顔になつて居た。それで此の刀を塞ノ神と言ふ者もある。橋立でもやはり賽ノ神の薪を貰ひに歩くが、似たやうな歌を歌ふ。

塞ノ神カンシ

お出しやれ出しやれ

出さんささいが

しわくそ婆ははよ

根知・小瀧でも、胡桃の木の腰物をさして行き、塞ノ神に焼いたが、何の理由かはいづれも知られて居ない。

サイノカミノヒ

能生谷では、神官が火をつけ、下早川では、晝の風と夜の風の入り代りの時間に火をつける。此時下早川では、例の塞ノ神の歌を歌ふ。下早川・能生谷では、其の火の照り具合で、作柄の豊凶を占うた。即ち火ほこりが、東と南の間へ向ふと、風の吹きがよくて、作もよいと言ひ、北・南へ向く時は、火の散りも悪くて、作が悪いとは、下早川の占ひ方である。能生谷では、火が眞直に上るのは、作柄がよく、もやもやとして、火の腰の弱いのはいけないと

言つた。橋立では、デカイ火ほご良いと言つた。大和川では、デカイ火の部落は、漁が多いと言ふ。浦本・大和川の漁村では、南の山の方へ焼くづれると作が多く、反對の海側なら大漁だと言つた。さちらへ轉んでも損がないと言ふわけである。上早川では、藁が全部燃えれば豊作、残れば不作だと言ふ。焼後の灰は、川へ流すものだとは、能生谷で聞いた。尙橋立では、頭の病にかゝらん様にと、女は頭の毛をもつて行つて焼く。

クシモチ

下早川では、塞ノ神の火で、竹の先に餅をはさんで、焼いて食ふと言ふ。是が串餅で、食べると、其年は病氣にならないと言はれて居る。今井・西海では、塞ノ神ノ餅を食ふと達者になると言ふ。能生谷では風を引かぬと言ひ、大和川・橋立・能生谷では、夏瘦をしないと云ふ。又厄年の者は、賽錢を火に向つて投げるが、此の錢を拾つて来て、爐の鍵様につけて置く。子供が爐に落ちないと言つて、小瀧・根知では競争して拾ひ取る。

タケノカラカイ

青海町字青海で、正月十五日の晝行はれる、竹ノカラカイと呼ぶものは、一風變つた行事であつた。町を嚴重に中央から二つに分け、若者が主體となつて、孟宗竹の引合をするのである。先づ東西の宿の前には、カザリ竹が立てられる。長い孟宗竹に、五色の短冊を七夕の様に、中程に扇子とか酒樽とかを縛る。此處に集つた若者は、酒を飲んで皆素裸になり

顔は紅で隈取る。御幣を先につけたイサミ竹を擔いで行つて、兩陣の中央に立て、喊聲を舉合ふ。愈々の時は、御幣を先につけたアワセ竹の元を合せ、皆でしつかり抱いて引合ふが、直に離れて仲々勝負がつかぬのである。アワセ竹にひまが入つたり、引つばられてしまつたりした方は負で、負けた方は漁が無いと言つた。終ると濱へ出る。濱には正月の松が、子供達の手で、兩方に積んであり、それに火をつけて周をまび廻る。

蝶々 左義の蝶

菜の葉に止れ

菜の葉があいたら

葦よしの葉に止れ

と歌ひ、しばらくすると、火のついた松を、手に手に持つて海へ投入れ、終るのである。

一七 二十日正月以後

ハツカシヨウガツ 全般的には、正月二十日を二十日正月と稱し、雑煮を祝ひ、仕事を休む位のものである。十五日から里へセツチ（今井）に来て居た嫁なごの、此日まで滞留する所も少ない。浦本では、その理由を死損破損と言つて、四と八とを嫌ふから、十四日に來ず、十八日に歸らずだと、無理に説明してゐる。

シマイシヨウガツ 下早川では、此日を、終い正月と言ひ、小正月に飾つた繭玉やガヤノ木を納め、小豆粥をする。此様に、正月を終る日であるから、正月ジマイとも、今井・上早川・根知・浦本などでは言ふ。仙納では、此日繭玉を下し、繭玉の木を若木と言つて焚き、あたって若くなりたがると言つた。

コジキシヨウガツ 糸魚川では、正月二十日を、乞食正月ともよび、春駒の來る日とした。春駒は次の歌を歌つて來たものだと言ふ。

春のはじめに 春駒なんぞ

夢にみてさへ よいとも申す

はいさうさう しつかと乗込め

乗つたら放すな、はいさうさう

上早川・濁澤では、乞食正月とは言はないが、正月申神佛に飾つて置いた餅を、此日皆下して煮て食ふと言ふ。浦本では、鏡臺に供へておいた鏡餅を、此日下し、初顔を寫すから、二十日をだとしやれる向もある。

Q ハツエベス

正月二十日をもつて、初夷と言ふ所は、根知にあつた。朝雑煮を祝ふだけで、別に初夷の御馳走と言ふわけでもないが、兎に角夷様の御タツバイ始メだとは言ふ。小瀧でも此日お雑煮を夷様に上げる。然し今日が始めてと言ふわけではなささうだ。大和川の田伏では、春夷講はるえべすこと稱し、六月二十日の六月ノ夷講、十一月二十日の秋夷講と共に、地引網の漁師は祝ふ。

Q ハツテンジン

能生谷では、正月二十五日に、初天神の祝として、小豆粥をすると言ふが、極めて簡單であるらしい。青海では、昔は天神様へ、筆を持つて行つて供へ、お参りをしたと言ふ。根知には、天神様へ字を書いて奉納する所もある。糸魚川では、昔は寺小屋に集つて、餅を飾り、書初を張つたと言ふ。此の町には、清崎天満宮へ、松皮紙の旗をもつて、お参りに行く所

もある。

テンジンイワイ

西海・下早川では、天神祝と言ふ。西海では、御神酒と餅を上げ、子供に御馳走をする。此の村には、此日仕事を休んだら、正月の餅を下して食べたりする部落もある。又天神様の餅を食ふと、讀書が出来ると言ふ部落もある。下早川では、神酒・雑煮・魚を供へ、天神経を上げる。

テンジンマツリ

上早川では、師走の終にもう天神棚を作つて、菅公の像を祀つて置き、正月二十五日に、子供が甘酒の祝をしたと言ふ。又その或部落では、子供の家で順次宿をし、豆腐や油揚げを持寄せ、子供に祝はせる。青海の橋立では、師走二十八日に餅を搗くと、天神様を床の間に掛けて供へる。一般の神様には、三十一日に据ゑるが、天神様だけは早かつた。正月の二十五日になると、其の鏡餅を焼いて雑煮にして供へ、天神様をしまつた。

テンジンコウ

市振では、正月二十五日に、天神講をする。毎年番々に宿元へ集るが、子供は年別性別に、数組に別れて行ふ。天神様の掛字をかけ、米やオカズを持ちよつて祝ふ。此の天神様に供へた御馳走は、師匠に贈ると言ふ。上路の天神講も同様であるが、日は一年の終の師走の二十五日になつて居る。

ツグムリバライ 名立谷の奥では、正月三十一日を、正月の終だと言つて御馳走するが、是をツグムリバライと言ふ。勿論晦日拂の訛つたものである。小瀧では、此日を單にツゴモリと呼び、翌二月一日にかけて、御馳走をし仕事を休む。

ツムグリダngo 正月三十一日には、濁澤では、晦日團子をつくる。それだけであるらしいが是が一年の團子始メだとも言つた。下早川は中曆の正月をする所であるから、その年夜は、新正月をするお隣の木浦の正月三十一日に當る。それで木浦では「早川のお相伴だ」なにと、言ひ草を言つて、やはり又祝ふと言ふ。

一八 節分と初午

マメマキ 立春の前夜行ふものを、節分或は豆撒と言つて居るが、今は一般には殆ど行はれて居ないらしいのである。名立町では、禪寺で行ふだけと言ふ。今井・名立谷でも寺で行ひ、豆を撒く役を年男とよぶ。名立谷では、年男は方丈より先に風呂に入り、豆を撒いて錢二錢を貰ふ。浦本・小瀧では、炒豆を佛に供へ、「福は内鬼は外」と言つて撒く。下早川では、主人が羽織袴で、豆撒をするが、座敷・茶の間の方は、「福は内、福は内」と、二聲言つて、戸をびしやつと閉てる。着物の裾を帯に挟み、所謂ヤマトバサミにした若い男が、後から「ごもつとも」と言つて、播粉木で床を打つ。終に庭へ出て、「鬼は外、鬼は外」と二聲言ひ、戸をびしやつとしめる。上早川の方は、少し人を笑はせるやうに出來て居る。尻の所に棧俵をぶらぶら吊した下男が、豆を柵に入れて、「福は内、鬼は外」と撒いて廻る。すると、下女は後から「ごもつとも」と應へながら、播粉木で下男の棧俵を突かうとする、下男は突かせまいと逃げる、そこで大笑になると言ふ寸法であつた。

セツブン 市振の節分は、以上と少し趣を異にして居る。豆殻で炒つた豆を、枵に入れて撒くのであるが、此の撒く時には、家の中に女衆を置かない。唱へ言は、

福は内 鬼は外

長生殿のカブラ矢

持つて来い

で、子供が後からやはり搦粉木を持つて、「ごもつとも」と應へて歩くのである。又此夜は胡麻味噌をつけた團子を作るといふ。

オニウチマメ

節分の豆を、高谷根では、鬼打豆と言ふ。上早川では、節分の豆を食ふと、其年は無病息災になると言ふ。小瀧では、撒いた豆を、喜んで拾うて食ふが、其晩は掃き捨て、はならんと言ふ。浦本では、福豆と言つて、厄除に所持する。濁澤では、子供は拾つた豆を三粒茶釜に入れ、湯を汲んで飲み、其の豆を汲み當てると、福が來ると喜ぶ。能生谷の柱道では、自分の年齢の數程拾ひ、紙に包んで自分の體を撫廻し、翌朝それを四ツ道に捨てる。此の歸る時決して後を振り返つてはならぬと言ふ。

シナノトシトリ

根知には、節分を支那ノ年取と言ふ、老人があつた。下早川でも、節分ノ年

は、異國の者と取勝つちで、異國の者よりも、先に取らんなんと言ふ。此處では、此日、干鰯ほしかの目を割いて、栗の木の串にさし、神に供へる。是は異國の悪神を、刺止める爲だと言ふ。上早川では、此の節分の廢れたのは、太陽曆になつてからだと言ふ。

ハツウマ 二月の初午には、名立谷の濁澤では、カソリモンをこさへて、神佛にあげる。下早川では、氏神様にオコソを供へ、モツソウを子供に與へる。モツソウと言ふのは、此處では握飯

の事であるらしい。今井の須澤では、男の子の初めての神参りで、綺麗な着物を着せて、神様へ連れて行く。糸魚川・下早川・濁澤では、「初午早けりや火早い」と言つて、火事の早いのを怖れる。是は八百屋お七が、午年生れだからだとは、濁澤の説明であつた。名立谷では此日馬を洗ふと言ふ。

イナリマツリ

糸魚川では、維新前は、御屋敷の御稻荷社の初午は、賑かであつたと言ふ。能生谷では、稻荷社に、赤飯や油揚げを上げる。浦本では、地曳網連中だけ、稻荷社に、サンバイシ(棧俵子)に赤飯と生魚二匹を載せて供へ、大漁満足を祈る。糸魚川の寺町では、お稻荷祭は四月十七日である。此の宮は、昔は海の方へ向いて居たが、走せ舟を止めて困つたと言ふ。

一九 山の神前後

ツナウチ 能生谷では、部落毎に、二月九日をもつて、綱打の日として居る。各戸から人夫が出て、橋木引や火災用の大綱を打ち、終つて出合ひ（ごしあ）で酒盛をする。

ヤマノカミノヨイダシ 二月八日の宵を、下早川では、山ノ神ノ宵出シとよび、昔はカンキョウと言ふ賭博を盛にしたものと言ふ。

ヤマノカミ 二月九日を、山ノ神と言つて、仕事を休む風は、全般的である。特に山師・獵師・炭焼・木挽などは、酒盛をして祝ふ。橋立では、床間にヨキゴか鉈とかを山ノ神として祀り其前にお鏡を据ゑた。上早川では、獵師は三發の空砲を打つと言ふ。漁村の市振は、女ばかりが山に出る所なので、此日は女衆ノ祭であつた。この子供は、此日「奉納正一位稻荷大明神」又は「奉納山ノ神大明神」と書いた紙を、稻荷社の木の枝にしばつて来る。かうすると字が上手になると言つた。

ヤクビ 此日山へ行くと、怪我をすると言ふのは、全般的である。根知では、山へ行つて怪

我をしたのは、舊二月九日と言ひながら、新の三月九日にも、兩日共山へ行かずに休む。今井では、若し行けば、何か祟があると言ふ。橋立では、山ノ神様が山林を廻り、山の整理をし、木の種を蒔いたりすると言つた。上路でも同様に言ひ、前日なまでも、山にぐづぐづして居ると、頭に木が生えると言つて、早く歸る。西海の奥でも、此日を厄日に數へて居る。

ヤマノカミダango 下早川では、此日少し大きめの山ノ神團子を作つて、さの木でもよいから、山の木に供へる。大和川では、小豆を入れたヤキモチを作り、家の高窓に供へる。焼餅と言ふのは、粉をねつて握飯大にし、火に焼いたものである。糸魚川でも、御馳走や御神酒を山へ向いた窓におく。浦本でも團子か餅を作るが、食器に九つ盛つて、窓口か床間か神棚かに供へる。是は山ノ神は口が九つあるからだと言ふ。根知では團子を串に刺して、窓口へ出す。名立谷では小豆飯を苞つこに入れて、裏の畑に行つて供へる。宇濁澤では、やはり小豆飯と油揚二つと、ギンブキ二本とを、サンバイシの小さいのに入れて、山において来る。

テングマツリ 大和川では、舊二月九日を、天狗サンノ祭と言つて、山へは決して行かぬ。西海では、神様が今日だけは出て、山に踊つて居られるから、山へ行くと、天狗様にほりつけられて、怪我をすると言ひて居る。又天狗様に食はれるとも言ふ。仙納（サシノ）の天狗祭は、舊六月二十四日

であるが、序に採録しておく。一名ボタ餅祭ともよぶ。事の起りは、次の様であつた。天狗山へ
 鐵入れをしたら、雹が降つて困つたので、巫女にみてもらふと、天狗の祟だと言ふ事になつた。
 そこで、其の山頂に祠を立て、玄米ボタ餅をつくつて祀つた。急の事だったので、白く出来な
 かつたのである。以來其日には、人足を祠までやると言ふ。

ヤママツリ 上路では、二月九日の山ノ神もするが、昔は正月十二日にも、廻り宿で、山祭を
 した。先づ風呂で、身體を清めてから、村にある山姥の祠〔郷土誌稿第一輯三十五頁参照〕にお
 参りしてから、酒盛をしたと言ふ。今井。小瀧では、二月十七日に、もう一度山ノ神をした。九
 日と十七日と、二度同じ事をする意味は、わかつて居ないが、山へ行かぬ事も、山ノ神にお供へ
 をする事も同様である。

ウサキノネンゴ 二月九日は山ノ神で、能生谷の東谷内では、村中小豆飯をつくるか、此日を
 兎ノ年貢と言ひ、九歳になる子供は、山へ小豆飯を擔んで行くものだと言つて居る。〔西頸城郡
 郷土誌稿第二輯〕の百三十九頁にも、名立町の傳説が載つて居る。

ビシヤ 能生谷には、二月九日をビシヤと言つて、若衆が櫛に御幣をつけて歩き、鳥追歌を歌
 ひ鳥追をする部落もある。此の由來等はまだ明瞭でない。

110 涅槃と彼岸

ダンゴマキ 舊二月十五日、今は皆三月十五日に行ふが、釋迦涅槃の日を、團子撒と言ふのが
 一般である。大野では、子供が首に箱を下げて、「寺山涅槃ドゥ、釋迦の勸め」と唱へ、鈴を振
 りながら、米を貰ひ歩き、それで團子撒をする。青海では、チンガドンガと言ふが、是は團子撒
 に鳴らす、鉦や太鼓の音から出た、呼名である。

シヤカノコツ 此の團子拾を、大野では、釋迦ノオ骨拾と言つて居るが、團子を佛の骨である
 と言ふ所は多い。團子を多く拾うた者は、當り年であること、柱道では言ふ。同じ能生谷の奥では
 大きな團子を天福と言ひ、是を拾ふ事を喜ぶ。小さい方を智慧團子と言ふ。テンブク灸やいとな言
 ふと、大きい灸を意味する所があるから、天福は大きいと言ふだけかも知れぬ。西海。根知では
 此の團子を食べば、厄病にかゝらぬと言ふ。名立谷・能生谷・大和川・根知では三粒持つて居る
 と、蛇除になると言ふ。浦本では、舟に下げておき、大波の時、水に投げこむと、風ぎになると
 信じて居る。

ジウヨサ 下早川の高谷根では、二月七日をジウウザと言ひ、寺で二百丁ゲテと言ふ事をす
る。此日は、釋迦が檀特山から出られた日だと言ふ。子供は寺に上げる蠟燭代を「なあんまい
だ」と唱へて貰ひ歩き、其の錢の一部で、ケンサイ飯を作つて食ふ。此の飯は、味噌と胡麻を
つけて焼いた握飯で、忘れられないうまいものだと言つた老人は言つた。

ヒガン オ彼岸は、春秋共、大體同様の所が大部分である。名立町では、中日をオテントサン
の一番大厄な日とし、入日を拜む。歌でも、太陽の入り端を拜みに、濱へ行く。浦本では、濱に
線香を立て、數珠をかけて拜む。磯部の奥では、高い山に上り、海に入る御來迎を拜む。其處で
は此の入日の中には、ノノサマが三體になつて、御光をさして居ると言ふが、是を親子で一緒に
拜んだものもあるし、一人で三度も拜んだ者があると言つた。ノノサマは此處では佛の事であ
る。根知・今井・浦本では、太陽が極樂の東門を開いて入る日だと言ふ。又入る時には、くるく
ると廻ると、糸魚川・浦本では言ふ。彼岸の終に、ハテ岸の水を飲ませると言つて、スヂを水に
下す者は、糸魚川にある。又糸魚川では、春の彼岸と秋の彼岸とは、天候が同じだと言ふ。

ヒガンマイリ 歌外波では、彼岸七日とも、寺へオ彼岸参りをするが、仙納では、入りの日に
参る。多くの所では、中日又は彼岸の中に一度、寺参りをする。濁澤では、お墓へ團子こありあ

ひのお花をもつて参る。

ヒガンダンゴ お彼岸さんの入りに、オ彼岸團子を作つて、佛壇に供へ、終に下すのが一般で
ある。下早川では、中日に團子を作つて、佛様に上げるが、重箱に十六の團子を入れ、十六羅漢
様と言ふ。濁澤では、春の時は、中日團子上げるが、秋には上げない。牡丹餅は秋も春も拵へ
る。

カイモチマツリ 根知の山寺では、三月十六日を、カイ餅祭と言つたが、何の由來か記憶して
居なかつた。カイ餅は粥餅で、牡丹餅の事であるが、此の餅を食ふ趣旨もわかつて居ない。

二一 雛 節 供

ヒナゼツク 西海では雛節供、下早川では雛才節供、能生谷・名立町・名立谷・市振では雛祭と呼ぶが、根知・仙納では三月ノ才節供、磯部・大和川・上路・市振では女節供、木浦ではたゞ才節供とも言つた。舊の三月三日であるが、今は皆四月三日に付つて居る。根知・大和川では、バトヒナを三月二十八日に出し、四月四日には終ふが、木浦・仙納では雛を飾らないと言ふ。バトヒナは土雛の事であるが、今はもう賣りに来る者もない。今井では、お針を上手にする爲に、女神を祀るのだと言ふ。根知では、此日テンマルカケと言つて、ゼンマイの綿を丸めて芯にし、色糸で綺麗にかゝつた毬を作り、雛ヒナ様に飾つた。名立町では、山櫻や椿の花を飾る。

ヘイナモチ 此日に限り、菱形の餅を作り、菱餅・菱形餅、或は雛餅と言つて、雛様に供へる風は一般であつた。上路では、米・粟・草の大きな菱餅を作り、親類へ配つた。濁澤でも、此の雛餅は、親分の所へ贈つた。大和川では、此のヨモギノ餅を食ふと、萬病の薬だと言ふ。甘酒を作り、炒豆或は炒菓子を作る所も多い。

ヒナアサバ 雛に供へる物として、其他に、大和川の田伏では、アサバがあつた。此の魚を此日だけ特別に、雛アサバと言つた。能生谷では、味噌煮の時、味噌豆をヌイゴにつないで干して置き、此日供へる事にして居る。

ハツゼツク 市振では、孫娘の初節供には、里から餅を贈つたものだと言ふ。根知でも、里から内裏様を一揃贈つたが、今はいづれも廢れたらしい。

モチニ 木浦・西海では、三日の日に、餅煮と言ふ事をする。是は西海・大和川・下早川・浦本・木浦の、中部一帯に行はれ、子供達が山へ行つて、雛煮をして食ふ事である。浦本では仲々賑かな行事であつた。昔は男は「男山八幡神社」、女は「神武天皇祭」と言ふ幟を立て、山へ行き、雛煮を作つた。此時の持遊び物は、男は金時デク、女は女ヘーナであつた。今は女の子供だけが、三宿位に別れて、雛煮をするが、ヘーナノパンだと言つて、隣宿といさかひをする位になつた。

チャゴト 能生谷では、茶事と言ひ、四五人づつ雪の消間に陣取り、お雛煮をして食べた。冬のうちから待つ程の、楽しいものであつたが、今は家で行ふやうになつてしまつたと言ふ。

ハナミ 名立町では、花見と稱し、昔は女も男も、甘酒を持つたり、干鰯を持つたりして、山

遊に行つた。雨の日には、若衆宿で椿の花を飾り、やはり花見と言つて、酒盛をし、ゴゼサンを頼んで歌を聴いた。女盲の歌うたひが、御前様である。火災が二度も續いて以來なくなつてしまつた。

ヨメゴト 名立町では、花見が廢れて、何時の間にか、嫁事に變つたと言ふ。全町五組位に分れ、老女が世話役で、十二三歳から七八歳までの女子に、それ／＼役をふつて、美しい嫁入の行列をするのである。行列は町を廻り、當番の家へ落着いて、食事を楽しんで終る。

ビンゴサンゴ 根知では、雛節供には、女の子供は、餅を擔いで、山へビンゴサンゴをしに行つた。是は山の細い木に上り、「ビンゴサンゴ、サラサンゴ」と言つて、木を揺つて楽しむのである。

オカカチ 浦本の鬼伏附近では、節供にオカカチと言ふ事を行ふさうである。詳細は知る事を得なかつたが、茶事や餅煮と同様、山へ行つて遊ぶ事らしい。語の意味は陸徒歩で、今のハイキングにあたる日本語であらう。

ヤマアソビ 雪の深い上路では、日は決つて居ないが、石楠花の咲く頃に、男女の若い衆は山遊に行くと言ふ。今井でも、日は決つて居ないが、四月末頃になると、若者が連立つて、山や濱

へ遊びに行くと言ふ。

二二 卯月八日

ヤクシサン 舊四月八日を、オ薬師サンと言ふ所は多い。仙納では、村中休んで、赤飯をつくる。西海の市野々では、毎月七日の晩は、薬師参りをし、豆炒をするが、四月七日と十月七日の晩は、赤飯をふるまふ。上路では、四月と十月の八日を休んで、餅を搗き、村の薬師堂へ参拜に行く。此處では、お薬師さんは、十月の八日に出雲へ薬合せに行き、四月八日に歸つて來ると言つて居る。兩日とも、薬師様へは、オカラコを作つて供へる。此の薬師については、〔西頸城郡郷土誌稿第一輯〕八十三頁を参照されたい。名立谷の濁澤では、少し異つた説明をして居る。中頸城の米山サンが、此日山上へ上らつしやるので、御戸開といひ、オカラコをして神佛に供へるのだ。米山サンは薬師で、十月八日には下へ下りて、冬を送られたのである。その下りる日にも、オカラコを新しい藁の苞に入れて上げる。

ハナマツリ 卯月八日を、根知では、オ薬師サンの命日で、釋迦の誕生日だと言ひ、山から花を採つて來て、佛さんに上げる。能生谷では、花祭と言つて盛大にする。濁澤でも花祭と言ひ、

ツツジノ花を山から採つて來、或は山吹や椿を交せて、寺の釋迦如來の屋根を葺くと言つた。寺では甘茶を出す。青海・今井・糸魚川で、寺へ甘茶貰ひに行くのも此日である。木浦では、オ薬師サンと言ひながら、やはり寺へ甘茶を飲みに行く。下早川・能生谷では、此日山へ登る風があると報じて居るが、その他詳しい事はわからない。

一三三 五月節供

ゴガツノセツク 五月ノ節供或は男ノ節供と言ふのが、全般的である。舊五月五日で、今は六月五日のわけであるが、農家は田植の最中だから、多くは田植後に祝ふ。ノボリ旗を立てる所は多かつたが、今は行はれなくなつたり、鯉幟に變つたりした。仙納はサ、マキ、市振はチマキ、浦本・今井・上路は餅、歌・西海は、三月節供並にボタ餅なごの馳走がある。此の前夜を市振では宵節供と言ふ。

ハツゼツク 市振では、新婚の初節供には、婿の里から餅を贈つたと云ふが、男の初孫の場合にはさうするか、もう一度聞いてみねばならぬ。

ヤネフキ 上路では、菖蒲と蓬で、出口々々に、三所ばかりづつ、屋根を葺くと言つた。下早川では、神に供へたり、屋根のコツラの角に二本づつ差す。歌。市振。橋立でも、門口に差したり、吊したりする。蓬も此日前までは、餅草と言ひ、食ふ事が出来ることは、下早川で言ふ。糸魚川では、男の子は、カツボをグミに編み、水をつけて土を叩き、次の歌を歌つて女の子を追ひ

廻したと言ふ。

男の節供は 日和節供

女の節供は 降り節供

カツボは蒲の葉と言ふが、或は眞菰の事かも知れない。グミは三本を一つに編む事である。尚同じ所では、此頃から、男の子の、クイツチヨと言つて、土に杭を打つ勝負が始まると言ふ。

シヨウブユ 蓬と菖蒲でたてる菖蒲湯は全般的である。蛇の子を孕まん爲、蛇の子を下す爲、蛇に食はれん爲なごと言ふ。此の由來は、各地で色々に傳へて居る。

西海では、昔の戦争に、菖蒲酒を飲んで戦ひ、勝つたからと言ふ。橋立では次の様である。昔諏訪様が龍宮から、エライ大蛇になつて歸つて來たので、人々が大騒をする、村の氏神様の縁の下へ逃げ込んだ。夜、神のお告で、翌朝早く露の中に、蓬と菖蒲の所に行き、轉がつた。すると蛇體が消滅したと言ふ。

大和川の話は次の様である。爺さんが、蛇に吞まれかゝつた蛙を助けたら、蛇は怒つて、爺の娘に子を宿した。すると蛙は恩返しに、蛇の子を下す菖蒲湯を教へたと言ふ。蛙報恩譚である。濁澤の話は、榊原の娘が、オサイが池の主になり、迷うた話になつて居る。榊原とは越後高田の殿様

の事であらう。然し此の娘が、蓬蒿蒲の湯に入るので、蛇の子は皆下りたと言ふが、さうく娘は池へはいつてしまった。その娘はメッコであつたので、池の物は皆メッコだとは、おまけがついて居る。メッコは片目盲の事である。

西海のもう一つの話は、全国的の三輪山傳説である。或家の良い娘の所へ、何處の者か分らぬ男が、毎夜来る。ちつとも素性を明さぬので、麻糸を小袖に縫ひつけてやつたら、山奥の池に這入つた事がわかつた。娘が池の傍に居ると、「人間は利巧だから、止めたらさうか」「人間に孕ましたから大丈夫だ」と言ふ聲が聞えたが、其後に、菖蒲湯の話が出たので、すつかり蛇の子を下してしまつた。

浦本では、此の湯に入り、頭にも菖蒲をまきつけると言ふが、魔除の爲や、頭痛除の爲といつて居る。

○ **オイセノタウエ** 御伊勢ノ御田植と言ふ日は、能生谷・糸魚川・西海・上路では、新の六月十六日であるが、此日に五月の節供を祝ふ所がある。上路では、伊勢講の者は、何十圓もはまつて、酒肴で祝うたものだと言ふ。糸魚川の蓮臺寺では、朝神明サンの田の田植をして後休むと言つた。

タイエアガリ 田植の終つた日に、田植上りの祝を、上早川ではした。ショウタメ即ち早乙女を上座に据ゑて、夕食に御馳走をする。稻ノ花と言つて、黄粉も必ず出る。能生谷でも、田植の晝食だけは、小豆餅を朴ノ葉に据ゑて食はせ、夕食には朴ノ葉にもつた黄粉を出す。黄粉はやはり稻ノ花だと言はれる。下早川では、植上りには、早生・中生・晩生の三把の苗を結うて、タカミに入れ、神棚に置く。是が田ノ神で、それに黄粉をつけた三つの握飯を、一升樽に入れ、二尺三寸位の若萱ノ箸をつけて供へる。

ノヤスミセツク 大和川の田伏は、五月節供を祝はずに、田植上りの六月十五日を中心として休み、野休節供と言つて居る。十五日は月休であり、十六日はオ伊勢ノ田植であるから、十四・十五・十六の三日間を休む。此處では、毎月一日・十五日・二十八日を、月の三日さんじつと言ひ、月休として宮参りをすると言ふ。能生谷では、日はわからぬが、やはり田植上りの三日間を休んで赤飯や笹餅をつくる。

二四 海祭・水祭

ウミセガケ 大和川では、二月一日に、海施餓鬼又は濱施餓鬼と言ひ、漁師が寺へ集り、魚の法事をする。大團子撒をし、血脈九枚と團子とを、八大龍王に上げると言ひ、海へ納める。浦本でも、海施餓鬼を行ふ。大綱組と小漁師組とが、團子を一日づつ作り、酒肴持参で寺に参り、魚の供養の後、鉦・太鼓の伴奏で、團子を撒き賑ふ。三月十八日が字中宿、四月九日が字間脇、四月十五日が字中濱となつて居る。

○ ハママツリ 大和川の字竹花では、四月十七日に漁を休んで、魚のどれる様に濱祭をする。昔は海の方へむいた、オマンドサンと言ふ祠があつて、其前で行つたが、今は祠もなく、部落の宮で行ふ。同村の字田伏では、四月十二日に濱祭を行ふが、昔は濱に無樂殿を建て、太夫が舞をした。然し今は部落の宮に移り、地引網の者だけで、簡單に行ふやうになつた。筒石では、四月三十日に、濱で神樂をするが、雨の時は魚市場で行ふ。名立町では、七月半頃に、女達だけで酒盛をすると言ふが、さういふ意味か明瞭になつて居ない。

○ マンドマツリ 漁の神をオマンドサンと言ひ、濱邊に祀つて居る部落は、大和川にあつた。濱祭はそこで行はれたのである。所の神主は豊受大神だと言つた。糸魚川の水崎では、三月二十一日に、マンド祭をするが、是は水神サンだと言ふ。所が同じ町には、山にあるマンドサンは、村境の神だと報じて居る。

○ フナマツリ 名立町で舟祭とよばれるものは、四月二十八日で、濱で舞をすると言ふから、濱祭と同じものであらうと思ふ。此日は酒は飲まれあひで、酔うた漁師は、見物人を押しこくつて轉がす、オシ祭だと言ふ。轉がしても怪我人は不思議に無いと言ふ。又道を通る人を、必ずつかまへて酒を飯ませ、飲まぬと通さなかつたと言ふ。

○ リヨウマツリ 大和川では、又二月と十一月の中、漁に出られないシケの日に、漁師は皆宮に集つて、魚祭をする。市振では、二月十日に金比羅サンと言つて、寺に集つて、漁師が御祈禱をする。

○ ゼンボウジマツリ 糸魚川の寺島では、善寶寺祭を、僧を招いて四月三日に行ふ。此處は姫川岸の部落であるが、毎年善寶寺サンを迎へに行き、お札を貰つて来て、庄屋にあづける。大水の際、人間の手の及ばぬ時に、是をふせる。伏せる時は、一般の人は其處に居ない。お札には三枚

即ち掘つて貰ふもの、砂を盛つて貰ふもの、決壊を止めるものがある。同じ町の東の端寺町でも、五月に此の祭をするが、此處では龍神二體を祀ると言ふ。

カワマツリ 糸魚川の寺島では、四月二十四日を川祭と言ひ、仕事を休んで餅を搗く。二十二日・三日は、神主と部落の重立が、夜籠りをすると言ふ。又二十四日は、夷祭と言ひ、舟の神として夷様を祀る。大和川の梶屋敷で、川祭又は川流レ祭と言ふのは、七月の十九日であつた。此の由來は、「西頸城郡郷土誌稿第一輯」一三頁に採録されて居る。

ミツサゲマツリ 西海では、水下祭と言ふ小祭を、五月一日に行ふと言ふ。仕事を休む事だけは報告されて居るが、詳細は記録されて居ない。

二五 六月 一日

ホネツギ 舊六月一日を、骨繼又は骨繼日と稱する所は多い。高谷根では、四つ前に仕事しは出ない。能生谷では、赤飯や餅をつくり、豆炒をカケ餅に載せて食ふ。此の豆炒を食べると、身體が丈夫になると言つた。大和川でも、カキ餅を食ふ。歌外波・小瀧では、正月の餅やカキ餅を焼いて食ふ。小瀧では、膝の節を合せると言ふ。田海では、骨を繼ぐ爲に、カキ餅を焼いて食ふと言ふ。浦本では、骨を強くする爲に、小正月の餅や豆を炒つて、神に供へてから食ふ。木浦でも、小正月の餅と米を炒つて食ひ、骨を肥やすと言ふ。糸魚川では、晝休の後カキ餅を食うて仕事を休む。食はないと、膝節がガクガクすると言ふ。今井では、カキ餅を食ふのは、骨を休める爲と言ふ。又一年の中だから、體の節々をつぐとも言ふ。橋立では、骨繼とも言ふが、ひざつよし膝節とも言ひ、やはりカキ餅を食ふ。

カキモチカミ 六月一日には、やたらにカキ餅を噛むので、市振では、カキ餅噛ミと言つて居る。カキ餅を噛めば、膝の骨が丈夫になると言ひ、仕事も休む。大和川では、骨繼日と言ひ、砂

糖餅を搗いたり、骨繼豆を炒つたりして祝ふと言ふ。

ダイロズイ 根知では、麻苗代おながしろと言つて、麻蒔の後には、必ずカキ餅を食うて、此方を骨繼と言うた。是はダイロが麻を食はぬ様にと言ふのである。濁澤でも、濁牛吸ダイロズイにならぬ禁呪と言つて、麻蒔の後でやはりカキ餅を食ふ。此處では、八十八夜ノ別レ霜と言つて、八十八夜前に、麻が生えるに枯れると言ふ。

シヨウガツジマイ 六月一日を、正月ジマイと言ふ所も一般である。浦本・橋立では、年始の賀詞は、此日迄にすればよいと言ふ。大和川には、馬鹿婿の話がついて居る。婿が正月ジマイの日に行くと、其の家では炬燵をして入れた。それで婿も、スンプクと言ふ藁靴にカンジキをはいて、のび盛りの麻畑を、踏荒してしまつたと言ふ。橋立・上路には、別の話がある。長者の獨娘ひさごが、一年中お正月のくらしをしてみたいと言つた。たやすい事だと、御馳走もあり、花ガルト・寶引を餘興に、毎日やつて居た。所が、六月一日になると、倉七戸前が、空つぽになつたので、正月のくらしを止めてしまつた。だから正月ジマイと言ふのである。上路では骨繼とは言はないが赤飯をする。

キンヌギ 衣ヌギ又は衣ヌギ日と言ふのは、高谷根・濁澤・糸魚川では、舊六月一日であるが

根知・西海・大和川では、六月二十日になつて居る。根知では、六月二十日の事を、中の十日と言ひ、キンノギとも骨ツギ日とも言つたと言ふ。所が、浦本は十八日で、此の二日早い理由を、隣の大和川では、次の様に傳へて居る。浦本の或る婆さんが、二十日の日に、うっかり山へ仕事に行き、天狗に叱られた。すると、婆さんはどんちを使つて、「天狗さん、私は早十八日に、キヌギをしました」と言つた。それ以來十八日になつたと言ふ。西海では、ボタ餅のやうな柔い物の馳走をする。固い物を食ふと、うまくキンがぬげぬからだと言ふ。糸魚川では、此日を堺に肥るとも言ふ。又此日、桑の木の下へ行くなど言ふのは、糸魚川・高谷根であるが、濁澤では、反対に赤飯を食うて、水を三回浴び、桑の木の下へ行けば、キンが脱げると言つて奨励する。木浦・能生町では、次の様に言ふ。人間が蛇のキンを見て、「やあだちや」と言つたら、蛇は「汝うなのが、なほやだ。桑の木にかゝつとるないか」と、人間に言ひかへした。大和川では、此日、水を浴べんならんと言ひ、濁澤では、七かへり食べて、七かへり浴べるとも言つた。

二六 天王と土用

オテンノサン 仙納では、オ天王サンのお祭と言つて、七月七日に赤飯か餅を飾つて休む。市振でも、オ天王サンと言ふが、七月十五日にオハギを搗く。浦本では、七月七日と十四日に天王サンと言つて、神輿が村を廻る。糸魚川のオ天王ハンは、七日に下り十四日に上る。昔は上る時は、夜中にこつそりで、御神輿を奥泉名子なんごが擔ぐ特權を持つて居た。大和川の天王様も御旅殿ごりよでんにある間は、やはり一週間で、神主はお籠りをし、夜は神樂があがつた。此の天王サンは作神さくがみで、神輿の上の孔雀には、稻の苗を食はへさせてある。行列には子供がお供で、矛・素戔鳴尊すさなみと書いた幡・供物・矢受ノ板・弓矢を持つて従ふ。荒い神だと言ふので、無暗に神輿をいさぶるのも其處の昔からの風であつた。

○ ギオン 橋立では、祇園と言つて、十四日だけ朝祝をし、御馳走の初穂をあげて休む。名立町では、七日から十三日迄で、町内の山車を出す。能生谷でも、同様一週間であるが、十四日の朝田の水見に出ると、水門に悪神が隠れて居ると言ふ。それは祇園サンは荒神だから、上る迄は、

悪神が隠れて居るのであると説明した。

○ センサイロク 能生町では、天王サンの祭禮は、同じく一週間であるが、若い衆祭と言ふ位で若い衆は元氣よく町内をもんで歩いた。子供はセンサイロクと言つて、竹筐に赤・青・黄の御幣をつけたものを持つて、其の神輿に従つたが、今は八坂神社御祭禮と書いた、小さい幟を持つ様に變つた。

ドヨウ 夏の土用については、報告が集つて居ない。わづかに丑ノ日には、水を浴びて、牛肉を食ふと言ふ位では一般的である。

二七七 七月七日

7
タナバタ 葉附の青竹に、色紙の短冊や、布で作った三角の袋をつけて、七日に飾り、十四日に川へ流す所は、上早川にあつた。歌外波では、竹に短冊をつけて、海や川へ七日に流したと言ふ。能生谷では、更に提灯もつけるが、此處では、寺小屋時代に筆子が盛に是を行つたと言ふ。名立町から名立谷にかけても、竹に色々の提灯をつけて、流しに行つた。其時名立町なごでは昔は女の子が、赤い揃の腰巻をして町をねつたと言ふ。

タナバタノカザリヅナ 上早川では、七夕の飾綱を、七日に川へ流した。下早川では、二本の竹の間に、赤・白・紫の色繩をはり、人形や三角の袋なごを作つて下げた。浦本・大野・根知等も、道路の空に同様の飾をする。根知では、新の七月七日が空流しで、八月七日が本流しであると言つた。浦本では、七日に飾つて、十四日にはもう送つた。

ツギボボ 西海では、竹に短冊をつける他に、ツギボボサンと言つて、布製の人形を下げると言ふ。根知・大野・上早川でも、此のボボを下げる事は同様であるが、浦本では、夫婦人形であ

ると言ふ。西海の釜澤では、一週間前に、男の子は竹に短冊を下げて、村の真中に立て、女の子は、人形や衣裳なごを作つて道路の空に下げる。

タナバタナガシ 竹に飾る所では、そのまま流すが、他は藁や麥殻や麻殻で、大きな船をつくり、皆是に積んで流す。此時

おたのばたさまいの

また來年ごさいの

と唄ふ所が多い。大和川・糸魚川・浦本等では、七夕丸なごと書いた帆をかけて、先づ往來を練つてから海へ行く。此時浦本では、七夕丸の傍に、五六歳の女の子二人位を乗せて、太鼓なごで囃して廻ると言ふ。女の子は赤い長褌袴・後鉢巻・襷掛けと言ふいでたちである。糸魚川では此日村の兩端に繩を張る所もあつたと言ふ。根知・今井では、子供達は、皆松明で川まで送つて行く。流した竹は、妙に陸へは寄らんと、名立町では言つて居る。能生谷では、流して我先にと逃げかへるのは、悪病神にとりつかれん爲だと言ふ。

タナバタノウタ 七夕を歌つた盆歌は、次の様なものがある。前の二つは浦本、後の二つは上早川で歌はれる。

おたのばた せめて八日も ござらんか

おたのばた様よ 天の川原は 西東

年に一度の七夕様よ 雨が三粒降りや 送られん

今年流れて 来年ござれ

歌の中の雨が三粒については、今井では、此夜雨が三粒でも降ると、牽牛・織女の二星は、川に流れて會ふ事が出来ない、所の人が喜ぶのである。それはもし二星が會ふと、焼病即ち腸チブスが流行すると言ふからである。

ナヌカセツク 下早川では、七月七日を、七日節供と言ひ、水浴びをしてはならんと、止めて居る。反對に水浴びを奨励する所もあるかと思ふが、今は報告されて居ない。

ハカソウジ 舊七月七日をもつて、墓掃除をする所は、上路・糸魚川等である。市振では、七月一日が墓の草むしりで、七日が砂利上げと言つて、墓の周圍に新しい砂利はらすを一面に敷く。糸魚川では、白い石を墓に並べる。濁澤では、此日家の煤掃をする。

ホンミチツクリ 仙納・濁澤では、舊七月七日を、盆道作りと稱する。濁澤では、お宮やお墓への道を作る。仙納では、村中で共同して、海岸の字筒石まで、一里餘の道の修繕をしたり、草

を薙いだりする。是は才精靈サンがお出になる道だからと言ふ。

二八 精靈棚飾

オシヨライダナ 木浦では、戒名を正面に、オ精靈棚を作るが、是をオ精靈サンを飾ると言つて居る。浦本でも、オ精靈棚を佛壇の外にこしらへ、過去靈牌や十三佛の掛軸を正面に飾ると言ふ。市振でも、精靈壇を別に作り、位牌を皆出して飾る。濁澤・名立町でも、精靈棚を別に作る。上早川では、佛壇の前に、別に盆棚を作る。以上はいづれも盆の十三日に作る。

オシヨライゴモ 精靈棚に敷くカツボゴモを、浦本・濁澤では、オ精靈菰と言つた。上早川では萱で編んだ菰を敷くが、上路では、青い葦を四通り編んだ、葦ノ簀を佛壇に敷くと言つた。名立町・能生谷でも、荒菰を敷くと言ふが、何で作るかは漏れて居る。又そこでは、蓮ノ葉に御馳走を盛つて供へる。小瀧・西海では、蓮ノ葉か桐ノ葉を敷き、野菜や蕎麥を載せて供へる。市振では夕顔や胡瓜の馬も載せる。

カケソバ 葉附の青竹を三本、鳥居形に組んで、是に野菜等を掛ける風は多いが、此方を棚とよんで居る所も多い。下早川・西海で、盆棚と言ふのは、此方である。西海では、兩側に柳を用

ゐる。是に掛ける長い物を、下早川では、掛蕎麥、能生谷・能生町では、掛索麩と言ふ。長い十六さゝげ・はす芋の殻・酸漿・其他色々掛ける。掛ける仕掛をせぬ所では、下に列べて供へる。

大野では、墓の前に同様の仕掛をして野菜を掛ける。

ミズムケ 市振は水の悪い所で、水が一番の御馳走だからなと言つて、十三日の墓参りの歸りに、弘法サン水を汲んで来て供へ、是を水向ケと言つて居る。根知・濁澤でも、水向ケと言ひ、水を供へる。水を供へるのは上路・下早川・名立町でも同じである。上路では、水鉢の中へは、盆花を切つて入れて置く。西海では、水を盛つた鉢の上に、盆花を一本渡して置く。下早川では、盆花を水鉢に一寸漬けては、供へてある茄子や胡瓜の上に水を散らし、其の花をも又供へる。木浦では、オ水と言つて供へて置き、戒名の位牌に南天なんてんノ葉でかけ、お参りする。濁澤では、精靈花で水をかけて拜む。名立では、此の水を三度替へるが、濁澤では水はいくら替へてもよいと言ふ。

ミズノコ 盆の十三日に、佛前に水ノコを供へると言ふ所は、下早川ばかり知れて居るが、其の作法の詳細は分つて居ない。たゞ此處では、夏大根なごの五・六切だと言ふ。又能生町では、茄子と南瓜とを細かにきざんで、蓮ノ葉に載せて供へる。その奥の能生谷の柱道では、茄子の細

かにきざんだものを、蓮ノ葉に盛り、蓬ノ葉に水をつけては、ふりかけると言ふ。是等も亦水ノコであらうと思ふが、名稱は報告されて居ないのである。

○ **ボンバナ** 盆にだけ佛壇や墓に供へる花は、たつた一種類で、是を盆花又はオ精靈花と言ふのが一般である。十三日に野から迎へる、此の紫の可憐の花は、ミソハギと言ふ名である事を、知つて居ない所ばかりである。木浦では蓮ノ花、仙納ではシホノギと言ふ花も共に供へる。市振では、山の上路から盆花賣が來ると言ふ。

○ **キリコ** 墓の前に燈籠を吊る風は、根知なきにもあるが、市振では、此の燈籠を切籠と言ひ、精靈壇の前にも吊る。能生町では、佛の行つて居る親類の墓へは、毎年盆中燈籠をやつておく。
○ **ホトケノツエ** 市振ばかりの風であるらしいが、此處では精靈壇に、佛サンノ竹杖と言ふものを作つて一本供へる。三尺五寸の青竹で、枝が三階位あると言ふ。

○ **ヤナキノハシ** 盆の十三日に、川柳の箸を作つて供へると言ふ所は、上路・下早川・能生谷・濁澤である。能生谷・濁澤では、家族も亦使用する。下早川では、神には供へない。濁澤では、此の箸だけは川へ送らないと言ふ。

○ **ボンイチ** 能生町では、盆の十日・十三日の二回、盆市を開き、盆に入用の物の賣買が行はれ

る。地元の能生町では、此の市から十三日に、オ精靈花を買ふ。近在では、所の名をとつて能生市と言つて居る。

二九 盆 中 行 事

ホンマイリ 盆中に寺へ参る事を、盆参りと言ふが、能生谷では、もう盆月には入つたばかりの八月一日に、米一升程を持つて寺へ行く。名立町・濁澤では、すべてのオ精霊サンは、一日からお寺へ來てゐると言ひ、毎夜お参りに行く。特に名立谷には、毎夜番々にオ夜食としてボタ餅を作り、十三日まで寺へ届ける所もある。

アラジヨウレイ 死者の初めて迎へる盆を、歌外波では、初盆はつはんと言ふが、多くは新盆しんはんと言つて居る。然し、其の作法なごは、別に變つた所もないと言ふのが、大部分であつた。たゞ市振だけは、新精霊と言つて、寺に別に壇を設けて飾つて置くと言ふ。

オシヨライムカエ 十三日の宵、迎へ火なき焚く所は、他に無かつたが、大野だけは、長さ六尺、周三尺もあるやうな、麻殻の松明に、火をつけて振りまはし、

お精霊 お精霊

此の火について

ございの ございの

とよぶ。然し今は麥殻の細いものを、子供だけが焚く。其の場所は、部落から少し離れた縣道である。

上路・歌外波・糸魚川・大和川・浦本・名立町では、オ精霊サンがお墓へ來て居るからと、十三日の夜墓参りをするが、十四日からは、家へ迎へたからとて、墓へは行かない。糸魚川・能生町では、十三日の夜、墓に水をむかへる。大和川では、墓の蠟燭の灯を提灯に移し、御内佛に持つて來る。是は灯について、先祖の靈が來るからだと言ふ。上早川では、昔は七日にオ精霊迎へをしたと言ふ。

ムカエヂヨウチン 市振では、盆の十三日の夜は、お墓にキリコを吊るが、家の軒にも迎へ提灯と言つて、提灯をともすと言ふ。もうかうした名稱は他には無いとみえる。

アシアライガイ 十三日の宵は、家内中揃つて、墓に精霊迎へに行き、盆花・蠟燭・線香を供へる事は、何處も大抵同じであるが、市振では、足洗粥と言ふものを供へるのは丁寧であつた。

シヨウライダンゴ お盆中に團子を作つて、佛に供へる所は多いが、仙納では、十三日にだけ供へて、是をオ精霊團子と言つて居た。能生町でも、十三日に墓に團子を供へる。其他では、此

夜の御馳走は多く饅頭のやうである。

ルシミマイ 市振では、盆中十六日迄、毎夜お夜食をもつて、お墓参りに行く事を、留守見舞と云つて居る。お夜食は、胡麻味噌をつけて焼いた團子と、お野菜とを、桐ノ葉に載せたものである。是はお墓には、留守居の佛が居て、替るがはる家に来るからであると言ふ。

ハカマイリ 市振の様には言はぬが、盆中三晩とも、墓に参る所は多い。所が上早川では、昔は三晩共参つたが、今は十三日だけになつたと言ふ。又十四日の墓参りはせぬが、十五日を重んずる所は少くない。高谷根では、十五日だけは赤飯を持つて行く。上路でも、此日は、赤飯やら團子やら、盆花やらお水やらを持つて行く。市振でも、晝は赤飯と、お野菜に茄子を竝に切つて洗米を交ぜたものを持つて行く。

ボンカンデヨウ 貸借の支拂は、暮勘定に對して、盆勘定と言ふのが一般である。然し、盆勘定には、綺麗さつぱりせずとも、暮まで待つて貰ふといふ手は、通用するのである。

ポングサ 根知では、盆前に盆草と言つて、牛馬にくれる草を、しこたま刈りためておく。そして盆中は、オ精靈様の足を刈るからとて、草刈をしないのである。能生谷・濁澤でも同様にする。糸魚川では、十六日の朝だけ草刈をしないと云ふ。

オタナマイリ 市振では、盆中に親類間で、オ棚参りと言つて、佛参りに往來する。此時は「盆前は色々お世話様になりました。相變らず心安う願ひます」と、新年そつくりの挨拶をする。

ボンヨビ 日は一定して居ないが、盆中に親類を招いて馳走をする事を、能生谷では、盆招びと言つて居る。正月の正月招びに對するものであらう。

ササモチ 盆中の人間の食物は、餅・赤飯・蕎麥・壽司・冷麥等、何處も似たものであるけれども、特に十五日の御馳走が重んじられて居るやうである。此日は佛の發つ前であるからであらう。餅を搗く所が多く、上早川・根知では、青い笹の葉に、此の餅を包んで、笹餅とよんで居る。濁澤の如く、此日雑煮をする所なごもある。

三〇 盆の終り

オタチビ 大和川では、十五日の夜精霊送りをすると云ふが、他は皆翌十六日である。當日を上早川・木浦・仙納では、精霊のオタチ日とよんで居る。此のオタチの時刻は色々であるが、大部分の所では、朝早くお發ちになると云ふ。下早川では、人に見つけられない中に歸りたいと、お精霊様が仰言るからだと言明して居る。仙納・能生谷では、晝食後とも云ふ。濁澤だけは「お精霊様は十三日遅くござるそい、遅うやりなんすまいか」と言つて、十六日の夕飯にタチワをする。タチワとは、出立端と言ふことで、饅頭の御馳走をした。

ミヤゲダンゴ 新たに團子を作つて、お精霊様に持たせてやる所は、上路・市振・西海・名立などである。市振では、是を送り團子と言ひ、上路では、その他に土産團子とも言ふ。西海では團子を紙に包んでやる。

シヨウリヨウオクリ 盆中佛に供へたものを、そのまま或は精霊菰に包んで、海や川へ送るのが一般である。柱道では、送つたら一切後へ振返つてはならぬと言ふ。下早川では、眞經を唱へ

て送る。名立町・西海では、鉦を叩いて「また來年ございの」と言つて流す。市振では、精霊壇のお下りを皆桐ノ葉に包みためておいて、土産と言つて送る。上路では、早う送らんと、自分の家のお精霊様が、他人の土産まで擔がせられると言ふ。西海の市野々・浦本ではお墓へ送つて行く。大和川は十五日の夜、佛壇の灯を提灯に移し、それを墓前の蠟燭に移して送る。迎へる時の逆である。

オクリヂョウチン 精霊送りの夜、軒先に灯す提灯を、市振では、送り提灯と言つて居る。大和川では、お墓へ精霊を送つて歸ると、家の前の雨垂下に、蠟燭八・九本、代る代るに、遅く迄灯す。その間に佛が極樂に着くと言つて居る。

ネボン 根知では、十五日・十六日は、地獄の釜の蓋も開くと言つて、盆踊を盛に踊り、十七日を寢盆だと言ひ、朝草刈位で仕事を休み、靜かにする。能生谷には、十九日と二十九日を願ひ休とし、是を寢盆といふ所もある。

トウロゾロイ 能生町では、十八日の夜、燈籠揃いと言ふ事をする。一町内から一つ宛の萬燈を出し、宮の境内に至つて、米大舟を踊つたが、今は踊の方はない。男の子供は、此時小さい燈籠に「奉納 氏子中 秋八月」と書いて持つて行く。昔はお七夕の歌を歌つたと言ふ。

ボンジマイ 歌外波では、十六日で盆はすむと言つたが、市振では、二十日の事を二十日盆とか、盆仕舞とか言ふ。嫁なまはお慕参りと言つて、十六日頃里へ歸り、盆仕舞の二十日迄泊つて居る。木浦の嫁も同様であるが、是をヤブイリと言つて居る。

コボン 名立町では、二十日盆で、やはり普通の盆は終るが、二十七・八日を裏盆だと言つて居る。西海でも、二十七日を裏盆と言ひ、今日が盆仕舞だと稱して居る。能生谷でも、此日を裏盆又は小盆と言つて居る。市振では、二十日を裏盆とも言ふ。下早川・能生谷には、小盆に對して、大盆と言ふ呼方もあつた。

三一 八朔前後

ハツサクノツイタチ 舊八月一日、今は九月一日を、單に八朔ノ朔日と言つて居る。根知・能生町では、さう稱して居るだけである。仕事を休んで、餅なまを作る所も、少しはある。仙納では、笹餅のつけじまひと言ひ、此後は笹葉に餅を包まない。下早川では、神佛に萩ノ花を供へる。今井では、田の畔の上に、酒を捧げて祝ふと言ふ。その趣意は不明である。名立谷には、此日神輿が村中廻つた所もあるが、肥料が臭いとて、宮のまはりだけになり、更にもう今は出もしないと言ふ。勿論其の宮の春秋の祭とは關係が無かつた。風祭と一緒にして、宮へ参る所は、上路・大和川・濁澤等であつた。西海・糸魚川・根知等では、此日御前山の觀音様に参る。

オバナマツリ 八月二十七日を、尾花祭と言つて、萱ノ穂を神佛に供へる所は全般的である。

名立町・大和川・市振は、二十八日と言ひ、能生谷の一部は二十七・八の兩日、橋立は二十六日の晩と言ふ。西海では、裏盆でもあると言つて、團子や餅を作る。上早川では、赤飯を作つて、初穂を祝するのだから、穂花祭であらうと言つて居る。仙納では、諏訪社の祭だからと言ひ、大

野でも、諏訪社の氏子の荻野家内だけが祝ふ。市振では、氏神へ供へる爲に、村人足二人位で、萱を刈らせ、其の餘りを各家が貰ふ。尙同じ所で、二十七日の夜、女衆が月の出を濱なぎで待ち御來迎と言つて、讀經祈願する。趣意は知られて居ない。

カヤバシ 青萱の箸を作り、神佛にも供へ、家族も用ゐる所が多い。是が新萱の箸の作り初めで、此日以前は山へ行つても萱の箸を作らぬと、濁澤・仙納・能生谷・下早川・橋立・上路等では言つて居る。神に上げない中に使ふのは、勿體ないからであるとは濁澤の説明である。

カヤモチ 此日市振では、萱餅を作り、神にも供へ、人も食ふと言ふが、明瞭でない。濁澤では、オカラコを白餅とも言ひ、萱の葉の苞つこに入れて神に供へる。

カザマツリ 今八月から九月にかけて、風祭を行ふ所は多い。糸魚川・大和川・西海・上早川は八月一日、仙納は八月十六日、小瀧は八月二十三日、柱道・濁澤・水崎は八月二十四日、能生谷の奥は九月一日、市野々は九月上旬といふ風である。橋立では二百十日の結果をみて、無難に行けば、氏神で祝をすると言ふ。濁澤・仙納・浦本・下早川・西海・糸魚川では、白い御幣を、神社の一番高い木に上げる。浦本では、オヤクの前に此の仕事をする人には、酒一升を與へる。オヤクとは二百十日の事である。小瀧では、明星岳の祠へ人足を立て、御神酒を上げる。糸魚

川では、オ天王ハンの四角に、青い稻を下げるが、其の苗をテンタロと言ふのは、説明されてるない。上早川では、善正寺で、風祭の草相撲をする。昔は三日續けたが、寺の娘二人を嫁にやる時、一日宛與へてやつたので、今は一日だけになつたと説明されて居る。

三二五 夜

ジウゴヤ 舊八月十五日を、十五夜と言ふのは一般である。高谷根では、此夜自分の影を地に映して首が無いと死ぬと言つたが、一人それを證明した者があつたさうである。上路では、死ぬ人は影が映らぬときへ言ふ。橋立では、此夜クビクサを防ぐヤイトをする。クビクサと言ふのは、頭から上が熱くなつたり、寒くなつたりする病である。灸の仕方は、バンドリを逆シマに着、摺鉢を被り、入口のネダを跨いで居て、摺鉢の尻に、灸を据ゑて貰ふのである。バンドリは蓑の事で、ネダは敷居の事である。

ツキミノモチ

十五夜には、仙納・濁澤では、丸い月見ノ餅を一月に供へる。名立町・上早川でも、餅や團子を供へる。仙納では、此夜から正月迄は丸餅を作り、六月の終から八朔の一日迄は笹餅を作ると言ふ。上早川では、更に尾花をも供へたと言ふ。今井では、外へ出て月を拜む。

スガイホウツ

十五夜・スガイホウツ・スガイホウツ。スガイホドと言ふのは、此夜、田畑の

作物を荒しに行く事である。上早川では、スガイホウツは天下のお許しなきと言ふ。橋立では初穂物を盗るのだと言ふ。糸魚川では、片スガイ、濁澤・市振では、スガイさへ持つて行けば、おんか晴れて盗れたと言ふ。何處でも、枝豆なごを盗つて、ウデボヤをするのが主である。スガイは藁を穂の方で結び合せただけのもので、つまり藁の二丈ある縄はない縄と言ふわけである。「十五夜やるぞ」と言ふのは、平常でも無断で盗る事を意味するやうになつた。市振・歌外波では、南瓜に縄をつけて、他人の店先にほうりこんだりする悪戯もした。

三三三 芋 名 月

イモノトシトリ 舊九月十三日を、芋ノ年取と言ふのは全般的である。西海では、芋三日とも言ふさうである。歌外波・糸魚川・西海では、此日になると、里芋は身がいつて、一人前になるのだと言ふ。大野・上早川では、此日以後はもう實らないから、種芋を取つてもよいと言ひ芋起しも此日以後に行ふ。従つて此の十三日は、何處でも初オコシで、夜は里芋のぐつ煮を作る。今井では、此日は芋の丸煮で、切つてはならぬと言ふ。

イモメイゲツ 上路・浦本では、芋名月とも言ひ、上路では又芋満月ともよぶ。浦本では、昔は十五日の方を芋名月と言ひ、三寶に芋ばかりを山盛にして月に供へ、十三日の方を栗名月と言ひ、栗を供へたと言ふが、今は十三日が芋を月に供へる日になつたと言つて居る。下早川では、此日取る分は、別の畑に作つておき、里芋のガシラに小豆をつけて食ふ。根知には、十三夜を月見ノ祝と言ふ所もある。

ジウサヤダンゴ 濁澤には、此日神に團子を作つて供へ、十三夜團子と言ふ家もあつた。上路

では、芋の煮た中に、團子を入れて食うた。こゝでは芋盗みに行つて、月の入りに盗まうと待つて居たら、どうどう夜が明けたなぞといふ笑話もあつた。能生谷には、オハギをつくる所もある。

ジヨウサイ 能生谷では、此夜を十三夜ジヨウサイと言ひ、スガイホウツをした。「ジヨウサイに行くぞ」と言つて、盗るものは十五夜と同じに枝豆なぞであつた。其晩に食べてしまふだけに限られて居り、何故だかわからぬが、盗んでからは小川をまたいではならぬとも言ふ。

オヤダスケ 仙納では、十三夜を別に親助ケと呼んで居る。此意味は、此日は、親木を傷けずに、豆だけでもいだり、柿だけでもいだりするからだと言ふ。此夜食べる里芋なごも、ガシラを残して芋の子だけとつて来る。

三四 九月三節供

サンセツク 根知では、九月に入つての三つの九日を、三節供と言ふ所がある。しかもそれぞれ名があつて、九日が初節供、十九日が中ノ節供、二十九日が乙節供と言つた。オトは終と言ふ事である。同じ所で、「三節供あはせりや、オタネあ笛吹いて行く」と言ふのは、麻の實は二節供位まで置くといひが、乙節供までおくと、地に落ちてしまふと言ふのである。

シマイセツク 西海には、九月九日だけを、終イ節供と言つて、餅を搗いて祝ふ所もある。シマイとは五節供の中の最後と言ふ意味であらう。

アマザケマツリ 西海の奥では、翌九月十日を、甘酒祭と言ひ、此日は半日だけ仕事を休み、全部落甘酒を作つて飲む。その趣意は明らかにされて居ない。

三五 神送・神迎

カミオクリ 橋立・歌外波・高谷根では、舊九月二十八日、今は一月後れを神送と言ふ。上路は一日遅く三十日、根知はもう一日遅く一日であるが、浦本の方は、早く二十七日で、神サンノオタチと言つて居る。歌外波で、今夜は神送でデツカイ荒れたと言ふのは、神様は雨風に乗つて行きなされるからだと言明して居る。根知では宮に参り、高谷根では、洗イ米を持つて宮に参り、浦本では、御馳走の他に豆炒をする。又今井では、神を作つて川に流すと言ふが、詳細は不明である。何處でも、神々が出雲大社へ縁談の帳面を拵へに行つて、一ヶ月は留守であると言ひ、名立町・浦本では、縁談を其間は御免と言つて居る。

カミノカリアゲ 青海の字田海・木浦・糸魚川では、新十月二十八日を神ノ刈上ゲと言ひ、やはり神々は出雲へお立ちになると信じてゐる。木浦では、此日までに稻刈が終へぬと、神様に負けたと言ふ。ボタ餅を作る所は多いが、木浦では、是を神サンノ辨當と言つて居る。

ヤツサヤツサ 神送・神迎をヤツサくといふので、大騒をするのは、市振の漁師達である。十

月三十日の夕方、漁場・網屋に五色の幟を立て、老若とも男子は皆海水を浴びて、素裸となり、ヤツサ／＼の掛聲で、鎮守様へ神酒と肴を捧げ、それから村の神祠を巡拜して歸り、網屋で酒盛をするのである。十一月三十日のヤツサ／＼も、送る時と大體同様であるが、今度は未婚の若い男ばかりが、素裸で櫛を打振つて各宮を巡拜、家へ歸つて祝宴をする。此處では、神様は伊勢の皇大神宮へ行き、來年一年の相談をするのであると信じて居る。

カミムカエ 送つてから三十日目に神迎をする事は言ふまでもないが、其の作法は送る時と大差はない。木浦では、送りにはボタ餅をするが、此日は神様のごさる目と言ふばかりである。根知でも、送りには宮参りをするが、お歸りには同様に歓迎はせぬらしい。高谷根では、やはり洗イ米を持つて宮に参り、歌外波は神送には赤飯、十月の八日サン即ち此の二十八日のカムカエには、ボタ餅をする。浦本では、又豆炒をし御馳走をもするが、特に誰も人を入れない風呂を立て、神サンノオ歸りを迎へる。

オスストリ 大野では、神送には何もしないらしいが、出雲から縁を結んでお歸りになる時だけは、お宮の掃除をして後、お祭をする。是を特にオ煤取りとよんで居る。

三六 十日夜と刈上

トウカンヤ 舊の十月十日を、十日夜と言ふ所は、根知・小瀧である。同じ所では、此日を又別にカ、セアゲともよんで居る。案山子は此日田から引きあげて、高谷根では天ジヨクへ、小瀧では出雲大社へ、又は暖國へ行くと言つて居る。根知では、十日夜の後は、畔を歩いて、田の水に自分の影の映らんのは、田ノ神様が留守だからだと言ふ。

カカセアゲ 案山子上ゲは、今は全般的に一月後れの十一月十日に行はれるが、糸魚川では十月八日、橋立では十一月二十日と言ひ、大野では、稻刈の終つた日と言つて居る。高谷根では、ボタ餅を作つて、カツカセに上げると言つて居る。小瀧では、餅を搗いて柵に入れて供へる。此様に、餅・ボタ餅を作るのが一般である。小瀧では、みんなに忙しくても、案山子様の御祝だと言つて、何でもよいから丸メモンをする。橋立では若し祝はぬ者があると、一年中田圃に立通しに番をして居つたのに怒り、子供を爐へ落して、火傷させると言ふ。根知でも、大體同様で一年中山の番して終うて來るのに、何も持つ物をしてくれなかつたから、子供を火へつつ轉ばして

おいて来たとき、案山子が言つたと言ふので、何を食べても、カイ餅でも、團子でも、テツペでも作らんらんと言ふ。テツペは大きな團子を平たくしたものと思へばよい。

カカセマツリ 糸魚川や今井では、案山子祭とも呼ぶらしい。今井では、案山子の御土産にと言つて、御馳走をするが、西海では、案山子を壊して捨て、餅を搗いて親類をよぶ。大野では、稻刈後オハギをして、親類へ配ると言ふが、刈上ゲ祝の代りにもなつて居るらしい。

カリアゲ 西海の刈上ゲは、毎年十月二十八日と決つて居る。是は伊勢皇太神宮獻穀田の刈上ゲノ祝であるからと言ふ。他は皆自家の稻刈が全部終つた日をもつてなし、日は一定して居ない。下早川では、最も見事な稻穂を束ねて、大神宮に上げる。仙納では、稻刈鎌を神棚に上げる。何處でも仕事を休み、餅或は刈上ゲノカイ餅を作る。上早川では稻刈の手傳を招ぶ。

三七 夷子講

ダイコンノトシトリ 橋立・高谷根で、大根ノ年取と言ふのは、舊十月二十日である。橋立では、夷子講と一緒に、魚でも買うて飲み、高谷根では、大根を煮て食ふ。上路では、大根ノ年取と言ふ語は、忘れて居るらしいが、夷子講には、畑中の一番良い大根を二本、夷子大黒に据ゑる。

イノコ 舊十月の亥の日を、亥ノ子と言つて尊ぶ風は、殆ど無いが、高谷根だけは、大根ノ年取の十月二十日を、亥ノ子でもあると言つた。此の亥ノ子は少しも動かなくなつたと見えて、毎年二十日であるらしい。

エベスコ 夷子講は、舊十月二十日、今は十一月二十日に、魚とボタ餅位の御馳走をするのが一般である。中でも少々變つたのを列記してみよう。根知では、魚と新豆の豆腐を神に供へるが何れも端の所ばかりだとは、何の意味かわからない。濁澤では、秋されたものを、皆一鍋に煮て供へる。小瀧には、カラッコ餅を作る家もある。上早川では、昔は商工の者が祝つたが、今はも

う少い。田海では、昔は漁師だけが祝うたが、今は一般に休業する。今井・上早川・名立町では、昔は若衆宿で、男女合同の酒盛をした。今井の如きは、二日二晩も酒盛をし、近い部落間では、交替で招き合つたと言ふが、今は廢れた。小瀧では、此日金がいいると、年中はいると喜ぶ。糸魚川の「夷子さんが腰たゝす後れた」とは、さういふ意味かよくわからないが、根知のシヤバ中の神様は出雲へ集るが、夷子様は不具かたわで行かれず、留守をして居るから、魚で御馳走をする、と言ふのと一致するかと思はれる。

三八 秋事 など

コイバシアゲ 忙しい秋を終つて、先づ行はれるのは、扱箸上ゲである。ボタ餅を作るのが一般である。仙納では、家内中ですが、名立谷では、農作を手傳つてくれた家へ配り、それらの人を、大野・根知・西海では、家へ招待する。西海では、稻の扱箸を、來年まで上げる祝であると言ひ、根知では、扱箸に御馳走を据ゑる。

コウリヤクヨビ 上早川では、秋が一切片附いてから、農作の手傳を招待して、御馳走をする事を、合力招びと稱して居る。然し、是は後出のオトリコシの當夜、同時に行うて居るらしいのである。

アキゴト 根知では、コイバシアゲの事を、秋事とも稱して、一つになつてしまつたが、仙納では、明瞭に區別して居た。コイバシアゲの方は家内だけで祝ひ、秋事の方は、親類・出入・手傳を呼ぶ秋振舞である。能生谷・名立谷で、秋事と呼ぶのは、穫レ秋が終るとする振舞であるが、次のオトリコシの如く、佛事も行はれると言ふ。又仙納では、正月の初に蕎麥をして、親類

を招ふ事を、春事と言つて居たが、今は廢れてしまつたと言ふ。
オトリコシ　上早川では、十一月中各戸で、精進料理の佛事振舞をするのが、オトリコシである。新米の餅を佛に供へ、お経を上げるのである。親類・知己・手傳までも、此時招待する。親類なきは、家内中を招ぶのであるが、凶作なきには、一人招きなごと、部落でとりきめると言ふ。筒石では、師走に入つてから、寺に集つて、合同のオトリコシをするが、少し區別があつた。即ち、婆サオトリコシが十五日、爺サオトリコシが十七日、若イ衆オトリコシが二十日、姉サオトリコシが二十一日で、女衆は錢二十錢に米・味噌・豆なきを持ちより、男衆は七・八十錢の會費だけである。能生谷の字東谷内にも、若イ衆オトリコシだけはあつた。

三九 大 師 講

ダイシコ　舊十一月二十三日、今は皆十二月二十三日であるが、此日を大師講と言ふのは全般的である。小瀧・根知・西海・橋立・上路なきでは、其の由來談を大體同様に傳へて居るのである。大師さんがデンボで貧乏なゴケ婆さんの所に泊り、小豆或は稻を盗ませて、小豆粥をして食うたと言ふのである。ゴケは寡婦の事で、デンボは片足ない事である。それで大師さんはデンボの足跡を隠す爲に雪を降らせてやつたと言ふ。

デンボダイシ　根知では、デンボ大師なきとも言ふが、やはりデンボなのは婆さんである。所が、濁澤・仙納・名立町なきの東部では、デンボ大師と言うて、大師自身がデンボなのだの説明して居り、仙納・濁澤では、デンボ大師の跡隠しとは言ふが、盗むなきの話は忘れられて居るやうである。糸魚川・上路・仙納では、此の大師を弘法大師だと言ふ。

ダイシコアレ　橋立では、「大師だ。今夜は雪の三尺も降るぞ」とか、「二十三日や來た。今度さんと雪や降るぞ」なきと言ふ。全般的にも大師講荒レとか、大師デンボノ跡隠シと言ひ、

盗人ぬすつとをしたデンボの足跡を隠す爲に、雪が降つた由來で、此夜を雪降りとして居る。

ダイシコダンゴ 仙納では、此夜の御馳走を、大師講團子か大師講蕎麥か小豆粥とかに決めて居る。それで紀伊の高野山が、蕎麥と團子で盛りこぼれるのも、此夜だとして居る。他でも大部分の所は、小豆粥を大師の好物だと言つて作り、團子も亦作つて居る。名立谷の杉之瀬では小豆粥に團子を入れるが、大師に供へる分には塩を交へないと言ふ。それは大師が塩釜へ落ちて足がデンボになつたからだと言明して居る。西海では、此の小豆粥を食ふと、痢を病まぬとも言ふ。濁澤・仙納・木浦・糸魚川では、腰抜け蠅ボでも、此の大師講さんの團子を食はねば行かぬと言ひ、お手塩に小豆粥を入れて、蠅になめさせる。だから上早川では、大師の小豆粥を食うてもまだ行かないなごと、生残つた蠅を批難する。

クリノキノツエ 名立谷では、此の足の悪い大師に、此日一尺五寸位の栗ノ木ノ杖を供へる、また栗の木の箸も供へる。是等を翌日川へ流してしまふ。下早川では、二十三日の夜に轉ぶと、デンボになるとか、火傷をすると、なか／＼癒らぬとか言ふ。

タイシコウ 根知・上早川では、別に太子講と言ひ、聖徳太子を祀る向もある。即ち大工・石工・左官・掘子・鍛冶屋・桶屋なごで、年二回會合し、賃金なごも其席で決めた。別に二十三

日とは決つて居ないが、今井・能生谷では、職人が太子講を重んずると言ふ。糸魚川では酒屋の酒男達は、此の二十三日に行列をして、親類廻りをしたと言ふ。筒石では、秋舟の乗組員を、親方が招待するのも此日である。

トウジ 能生町では、冬至に南瓜を食ふと、中氣にならぬと言ふ。又南瓜に年を越させると出来物が出来るとは、根知・上路・能生町なごで言つた。能生町では、愈々食べ切れぬと、年夜には外へ出して置く。上路では、針を南瓜に刺しておけばよいと言つた。

四〇 師走朔日

カワフタリ 師走一日をカワフタリと言ふ所は、根知・西海で、小瀧はカブタリと言つた。西海では、川向ふに作地を持つて居て、何時も川の厄介になる人達だけが、餅を搗いて川へ持つて行き、「此の餅を川の神様へ上げます」と言つて流す。上早川では、昔此日を、案山子祭として、フクデ餅を川へ流したと言ふ。根知では、禪宗の者ばかりが、コシキにかけた物を必ず食はんと言つた。それは釋迦が一週間の行に川へはいらつしやる日だからで、餅を搗いてノノサンに据ゑるのである。此時の餅だけは長方形で、井形に五重すると言ふ。ノノサンは佛の事である。

クルマヤマツリ 糸魚川の水崎で、車屋祭と此日を稱するのは、水に關係のある水車屋の事であらう。砂糖餅や豆腐の御馳走をすると言ふ。

コヒキアゲ 小瀧の老嫗は、別に師走一日を、子引上ゲとも言つた。川へ轉んだ子供を引上げるのだと言つて、餅の一日も搗いたさうであるが、詳しい事は忘れて居た。

クイシメダンゴ 上路で師走一日をクイシメダンゴと言ふのは、もう團子のやうな變り物を作る日の終と言ふ意味で、食終イ團子であつた。是を食はんと、川を渡る時、河童に捕へられると言つた。

シワスワスレ 橋立には、師走忘レと言ふ日があつたが、何日で何をする日か忘れてしまつたとは情なかつた。

四一 御満座

ジヨウドウエ 能生谷では、十二月七日を、釋迦の成道會と稱して、お寺で參詣者に小豆粥を與へる。釋迦が成道して檀特山を下り、最初に貰つたのが、農家の小豆粥だったからと、其の由來を言つて居る。根知にも、同様の行事と由來とを傳へて居る所もあるが、又十二月一日に川へ這入つて行をつみ、七日に川から上る祝で、オジヨウザと言つて居る所もある。西海には、小豆粥の他に、多分佛像の頸に、數珠のやうに掛けておく干栗の事であらうが、栗を一つづゝ子供に與へる所もある。根知・西海・今井では、此日をゴマンサンと稱して居る。今井・糸魚川では、寺で出す粥を、オ悟リ粥とも言ふ。以上はいづれも禪宗の家の行事であつた。

ホンコサン 眞宗・眞言宗では、法恩講サンと稱して、十二月二十一日から二十七日迄、説教をする所が多く、其の満座の日二十七日には、ゴマンサンと言つて、部落の道場へ老若男女集り豆炒・串柿・干栗なきを食うて夜をあかす。また市振では、此間子供達は、親類をまはつて御馳走になる。名立町でも、親類縁者を招く。筒石では若者を船頭が招く。

大野では、開祖親鸞の命日で、二十七日がお通夜だと言ひ、翌二十八日の朝、小さい餅二つを參詣者に與へる。是は開祖の骨だと言ふ。西海には、釋迦が五穀の粥を食べて、一週間の行をしだが、其の終つた日は今日だと言ふ所もある。今井には、三十五菩薩が死後何處へ行くか相談して、各自淨土を作つたが、地獄へ落ちて了つたのを、釋迦が七日間説教されて、濟度された日だといふ所もある。宗派によつては、十五日をゴマンサンとして居る所もあると言ふ。

ゴマンサン 仙納で一年中の部落費用の精算をする日を、マンゾウと言ふのは、満座の訛つたものであらうが、此の佛教の方のゴマンサンも、御満座サンに違ひない。ゴマンサンの特徴は、部落の者一同が、道場や寺へ集つて、甘酒や小豆粥、或は蕎麥を食べる事、豆炒・串柿・干栗等を食うて夜をふかす事、もう一つはいくら喧しく騒いでも叱らぬと言ふ事であらう。中でも最も大きな騒ぎは次のものであらう。

トウビヤイサ 能生谷では、二十七日の夜を、お逮夜トウビヤイサと言つて、寺に集り、次の歌を怒鳴つて押合をする。

トウビヤイサ トウビヤイサ

鯛のしよつから 煮て參れ

馬鹿こけ 精進だ

ヒツチヨサノ チヨウサデ

木浦の西性寺では、十一月の二十七日に、ゴマンサンと稱して、矢張押合が行はれる。此處では、村の青壯年が二組に別れ、裸になり、白鉢巻で、次の歌を歌つてから押合になる。

ドットコ ドットコセ

ウエ エイエイヤ アーエーヤ

エーヤラアーエイ ヤーエインヤヤラエー

ヨイサアーアン ヨイー

これがしらべだ エーイヤラアーエー

ヤーエーイヤラアエー

ヨイートナー ホーリヤー

ハーレーワ ハリヤリヤリヤ

ドツコイシヨ ヨイートコ

ヨイートコナ ホーリヤン エーエエ

一にや きのこの大日様よ

ヤーヘーエ ヤットコセー ヨーイヤナ

二にや 新潟の白山様よ

ヨイートナー ホーリヤー ハーレーワ

ハリヤリヤリヤ ドツコイシヨ

ヨイートコ ヨイートコナ

ヨイーヨイ ヨイヨイヨイ

ンリヤ ハリヤリヤン コリヤリヤン

ヨイートナ ヨイヨイ

押せや 押せ押せ 押せ下の關

押せば港が近くなる

ヨイーヨイー ヨイヨイヨイ

ハリヤリヤン コリヤリヤン

ヨイートナー ヨイヨイ

是から押合になり、勝敗がきまると「ざま見ろ、ざま見ろ、勝つたないか、勝つたないか」と、相手方を罵詈雑言すると言ふ。

四二 針 千 本

ハリセンボ 師走八日の注意されて居る所は、誠に少かつた。根知・小瀬では、師走八日ノ針千本と言ひ、針千本と言ふ海の動物を吹上げる程荒れると傳へて居た。尙根知では、此日荒れると、翌年は豊年だと言つて居る。大和川でも同様で、師走八日ノ針千本には、海岸から三里程も奥の御前山へ、砂三粒でも飛つて行くやうな荒がせんと、來年は作が悪いと言ふ。糸魚川でも、針千本と稱し、やはり御前山まで砂を吹上げる程の大風が吹くと、神風が吹くと言つて喜び、明年は豊作だと信じた。

ハリセンボタンゴ 上路では、僅に師走八日には、針千本團子を作つた事を記憶して居た。此處では、「針を餘りびしやると、針千本になる」とおきかすと言ふ。針を粗末にして、あの針だらけの針千本になつて、海底を這ひつづつて居るのでは、たまらないわけであつた。

四三 松迎と松飾

オマツサンノトシトリ 師走の十三日を、オ松サンノ年取と言ひ、上路では、松迎に行つた。新しい縄で縛つて來、家へつくと米を撒いて供へ、別に神棚にも御飯をあげる。下早川の高谷根では、十三日オ松サン迎と言つて、村中のきまりであつた。糸魚川も昔はさうであつたと言ふ。

ジウサンチトシトリ 師走の十三日を、根知の字山寺では、十三日年取と言ふが、其の由來は古老も知つて居なかつた。小瀧の一部でも、此日正月の松を迎へに行くと言ひ、僅に正月の支度をはじめめる日の痕跡をときめて居た。

マツムカエ 松迎には、一定の期日の無い所が多く、早い所の上早川では、秋をしまふと、十一月下旬にもう迎へると言ふが、大部分は師走の二十日過になつて居る。西海の一部では、更に遅く、師走の二十八日に、年男が迎へに行くと言ふ。

サンガイマツ 名立谷では黒松、浦本では男松をかざるが、能生谷では、女松をえらび、ここ

の松林からでも伐つてよく、枝をおろし、三階か五階にして迎へて來る。下早川でも、三階松を調べて迎へると言ふ。大和川・上路では、三階松・五階松・七階松を迎へ、大和川では、いくら禁しても、芯松を迎へぬと、承知しないと云つた。上早川では、迎へて來ると、屋外の清水の湧き出る處か、屋内の水舎におく。

ノボリマツ 小瀧では、家よりも低い方の山から、松を伐つて來る。一代の間は、此の方向を變へてはならぬと言つた。此の松を上り松と稱して喜び、家の近くの木に縛りつけておく。能生谷の柱道は、西北の方向には、松山もなささうな所であるが、西北から迎へると言ふ。又上早川・下早川は共に、何故か遠い濱山から迎へて來ると言ふ。

オマツハヤシ 小瀧の一部には、師走の十三日或は二十九日に松を迎へ、オ松ハヤシと言ふ所がある。ハヤシとは褒める意味の語で、伐ると言ふのを忌んだ言葉であらう。

カドマツ 小瀧・根知・糸魚川・名立町では、門松はもうして居ない。上早川でも、門松は年廢されるばかりだと言ふ。上路では、舊家だけしか立てないと言ふ。然し、今井・下早川では是を尊重して、一番大きな松を、門松にして居る。能生谷の中央部では、三階の松に、竹或は讓葉をまぎて、新しい杭に縛りつけて、門松とした。縛り方は七・五・三にする。多くの所では、

大戸の柱に結びつけておく。是は雪の深い爲に、外へは立てられないからだ、上早川では言つて居る。能生谷では、餘つた松の葉の一房を、板の上に立て、どん／＼と板を叩き、子供は次の歌を歌ふ。

松々踊れ

正月三日に

鼻とつてくれら

キ 西海の羽生で、單にキと言ふのは、門松の根元に、二つに割つて立てかける、ホウダラノ木の事である。ホウダラノ木とは、刺の多い櫨の木の事であらうか。

ダイドコロマツ 下早川の寺では、寺の臺所に、大きな松を供へて、是を臺所松と言つて居る。正月中みんな作法が行はれるかは分つてゐない。

マツカザリ 小瀧では、年取の三十一日の朝、風呂にはいつて、體を清めてから、松飾をする。下早川では、松を飾る所は、大神宮様・荒神様・夷様・年神様・倉の神・まやの神・ながし・湯殿・佛様・天神様である。上路では、其他便所にも、松にキリサゲをつけて飾る。此處で、床間に二本飾る松は、神様の休み所と言つた。浦本では、神棚・床間の他に、船や餅搗臼に

も飾る。

オマツ 西海では、正月の松の中で、一番大きいのを、神棚の柱に一對飾り、是をオマツと言つて居る。此の松を下げる迄は、年男は其下で寝ると言ふ。能生谷では、神棚の松の下へは、女が出てはならず、又松より上に、人が上つてはならぬと言ふ。

ハチジヨウサマ 上路では、一番大きな五階か七階の松を、ハチジヨウ様と言ひ、爐のある部屋ほしよの六本柱の東につける。新しい縄で、ねると縁起が悪いから、二所しぱり、ほしよ繩を寶珠の形のガワ(輪)にしたものと、キリサゲなごこを飾る。

ツタ 神棚には松を用ゐぬ所もあつて、小瀧では、常緑の冬蔦を飾る家もある。西海の奥では杉、糸魚川・名立町では榊を用ゐる。糸魚川の如きは、佛壇へも榊を入れると言ふ。仙納では榊の他に松も神に供へる。

シメナワ 糸魚川では、年男がたゝかない藁で、普通の藁繩と反對に、左繩にする。上早川では、年男が大年の日に作る。能生谷では、三十日に絢ふが、尻の下にしたり、唾をつけたりしない。小瀧では、神棚の前ばかりでなく、家の入口にも張る。更に、年取の晩、べ繩を屋敷の周圍に張る風は、濁澤にあつたが、今は寒アキに張る者が、たまにある位になつた。

ダイコクジメ 神棚には、最も太い縄を張る所があるが、上早川では太ジメ、能生谷の柱道では、大黒ジメと言ふ。浦本では、神棚の縄の頭は右に、尾は左に向けると言つたが、家例によつては、神棚の柱にからみ方があるとも言ふ。

ワジメ 糸魚川・下早川では、縄の丸く輪にしたものを、輪ジメと言ひ、松につける。やはり作り方や、七五三に菓の端を垂れる事は變りがない。

オンピラ 松につける紙の幣を、名立町では、オンピラと言つた。上早川では、此の紙の幣を三筋づゝ縄につける。下早川では、水引で、豆木と此の幣を松につける。名立谷では、豆穀と白紙の片端切つたものを、松につけた。能生谷では、是をキリサゲ又はキリカミと言つた。

オマツガミ 浦本では、家の入口・神棚・床間・舟等の芯松には、オ松紙と言ふものを飾ると言ふ。是は枲・寶鍵・福槌・扇子等を切抜いた紙である。大和川でも、同様であると言ふ。

四四 煤掃と奉公人

ススハキ 今井の字須澤では、暮だけは何處の家でも、必ず家中を掃除し、煤をきれいに拂つて、年を迎へる。此日も、須澤では三十一日、糸魚川は二十六日、根知・下早川は二十日に、一定して居たが、多くの所は、二十日過で、日なごも一定して居ない。能生谷・上早川では、お盆の前と、年取の前と、年に二回、煤掃を行ふが、やはり一定の日はない。西海では、春はお祭の前、秋は收穫のすんだ後に、煤掃をすると言つて、新しい神を迎へる爲には、暮の大掃除はしないらしい。

スストリ 煤取と言ふ所は、磯部の奥にあつた。小瀧では、拂うた煤は、一年中の悪魔を拂ふがだと言つて焼くと言ふ。

オウススハキ 上早川の舊家といふやうな家では、昔は師走の二十八日を、大煤掃と言ひ、家族全部が朝早く、下僕の家引遷り、夕方煤掃が終つた使を受けて、我家に歸つたと言ふ。其の假寓中に、分家や下僕の家からは、煤拂中の見舞として、團子・餅・蕎麥・豆炒等が贈られ

た。

ススオトコ 煤掃の爲の箒は、神棚をはくものと、背のこゝかぬ高い所を拂ふ高等との兩方を能生谷では、藁で作ると言ふ。此の竹の先に藁をつけた高等を、能生谷・根知・名立谷では、煤男と言つた。用がすむと、根知では、煤男をトンボ（入口）の外に、立てかけて置く。名立谷ではすぐ捨てる。下早川では、川へ流すものは、神様の煤と、その箒だけだといふ。

ススネコ 磯部の仙納では、此の高等を、煤ネコと呼んで居た。親の代から、一定した竹竿が傳つて居て、それを毎年用ゐ、終ると又二階へ大切に上げて置くと言つた。

ススモチ 煤掃の晩食には、上路では、煤餅を搗いたが、同じ村の字荒澤では團子、能生谷では蕎麥を、特別に作る。根知では、神様をあつちこつち動かすとい、お神酒を上げると言つた。

トシノイチ 能生町では、年ノ市と言ひ、師走の二十日・二十四日・二十八日と、三日置に三回開き、能生谷其他在方から、色々の農家の自家製品を持つて來て賣る。浦本では是を能生市と言ひ、正月舟に供へる餅を入れる爲の、新しい吠を買ひに行く。

アラシヨウガツ 上路では、搗屋つぎやのなかつた頃は、新正月には、米搗なご出來ぬから、暮の二十五日六日に搗いて米搗ジマイとした。

ホウクニン 奉公人の親元へ引取る日の、師走二十八日の所は、能生谷・糸魚川・西海・下早川なごである。下早川では、此日小豆粥を御馳走したり、更に送つて行く風なごもあつたと言ふ。大野では、もつと遅く、年を取らせてから、歸したと言ふが、糸魚川の一部には、二十五日の所もあつた。根知では、まだ早く、霜月の十五日であつたと言ふ。然し、子守は師走の二十八日迄使はれたと見え、能生谷では、

師走の八日が來たら

此の子さらばと

いとままで

根知では、

いつか

師走の二十八日來たら、

行こもの親里へ

と謠つて、子をやたらにいぶつて居たと言ふ。根知では、此の子守には綿入の一枚か、袖そでなし無の一枚も與へて歸したと言ふ。

メミエ 新たに、其年奉公しようと思ふ者は、上早川では、正月十四日に、主家へ行つて一泊し、翌十五日を祝うて、一先づ親元へ歸つた。是を目見エと言つた。下早川でも、十五日に主家に一晚泊をし、其年の奉公を決めたと言ふ。

クビククリダンゴ 西海と隣の下早川では、愈々新しい主家へ奉公に行く日は、團子を親里で御馳走してもらつた。此の首ク、リ團子と言ふ由來を、下早川では、主家に首をくゝられて居る様なものだが、辛抱して勤めると言ふのだとも、奉公しようか、首くゝらうかといふ境目だからだとも言つて居る。此の奉公に出る日は、上早川が二月一日、根知・下早川・能生谷・西海が二月二日、名立町が二月八日頃で、いづれも舊暦の日である。根知では、子守は七草を祝ふと、もう主家へはいつたと言ふ。能生谷の「七日に食うて、八日に行こい」と言つたのは、子守の身の上であらう。

四五 餅搗と餅飾

クモチ 奉公人の親里へ引下る日、師走の二十八日に餅を搗く所は、根知・能生谷・糸魚川・小瀧であつた。然し、それも今日では、二十五日以後二十八日迄の間になつたと、西海・上早川・下早川から報ぜられて居る。唯二十九日だけは、九餅即ち苦持と言ふ意味で、能生谷の一部・糸魚川では、嫌つて居るが、能生谷ではもう平氣で、二十八日・二十九日・三十日の三日間を、餅搗に當てゝゐる所もある。又能生谷では、寺方が二十五日、在家は三十日と、區別して居る向もある。同じ所では、何故か二十一日には、嫌つて餅を搗かないとも言ふ。

モチツキ 能生谷の一部では、餅搗の時の大釜の火を、昔の様に火打石で焚きつけ、白の下に藁を敷き、塩を撒いて清める。此の藁も、死人のあつた家では、敷く事をせぬと言ふが、祝と穢とを嚴重に區別すると見える。小瀧では、お正月中の餅を、皆一べんに搗くから、一年中で一番ゴイセ（豪勢）な餅搗になると言ふ。

フクデ 小瀧では、最初の白から、お供へのフクデ餅をとり、あとは白や豆の入つたオシ餅に

する。押餅は平たくのして四角に切るのので、ノシ餅又は切り餅と言ふ所もある。最後に其場で小豆をつけて食ふ小豆餅や、大根おろしをつけて食ふオロシ餅をこる所もある。

オカザリ 神棚・佛壇・倉・井戸等には、お松様やお神酒やおあかりをあげるが、オカザリと言つて、お餅を供へるのは、やはり大晦日の日である。年男或は主人が、早く風呂へはいつて、體を清めてから行ふ。西海・名立谷では、氏神にもフクデを供へると言ふ。オ飾の仕方は色々あるが、大抵の所では、白紙の上に、フクデを大小二つ重ね、柚子或は蜜柑を載せる。能生谷では此のフクデを、大蛇を退治した時の大骨、蜜柑を目玉だと言つて居る。名立谷の濁澤では、二つのオ飾は、ヤマダフオロチの目玉で、昔は何か言ふ齒朶の葉を、大蛇の大骨だと言つて、一緒に神佛に上げたと言ふ。又ゼンマイとい山菜は、大蛇の何處とかで、正月中には食ふことにして居た。能生谷には、フクデの他に、切り餅も二つ重ねて供へる所がある。下早川の奥には、四角な豆餅・白餅の上に、丸いオツナエを載せ、更につないだ栗、又は串柿を載せると言ふ。其處では、夷大黒にはオツナエの代りに、フクデを供へると言ふが、鏡餅の大きいのがフクデ、小さいのがオツナエと區別して居るらしい。糸魚川の水崎では、一升榊大の白餅の間に豆餅を入れて三枚重ね、其上に白米をのせ、其の向ふに榊を置くと言ふ。

四六年神懸魚

トシガミサン 木浦では、寺とタヨサン（神官）から、次の如き御札を迎へて、年神様と言つて居る。

日天子 七福神

宇賀善神

月天子 八將神

御年大神御靈

此の神様は、正月三日間だけ、居らつしやるだけである。三日か四日の朝には、供へて置いたオ

飾を、今度は焼いて煮、もう一度供へ、其後紙に包んで、お松と一緒に、アキの方へ置き年神様を送ると言ふ。西海でも、昔は七日、今は三日に、松をアキの方に送つて、年神様送と言ふ。小瀧の年神様を送るのは、四日である。能生谷では、「御年皇大神宮」とした御札が、年神様でアキの方へ祀る。此處では、古い年神様は、タカ（二階）に、次々と置くので、家の年代もわかると言ふ。根知には、年夜に大戸の戸を開けておくと、はいつて來ると信じ、年取の膳を年神様に供へる所がある。

トシトクサン 年神の事を、歳徳様と言ふのは、名立谷の濁澤であつた。それを茶の間のなげしの上に、年棚をつくつて祀り、一番大きな松を供へる。正月三十日間は、をらつしやる神で、正月七日の日までは、毎日御馳走をかへ、其後は十五日二十日なぎに供へ、三十一日は團子ハジメなので、團子を供へて拂ふ。此の松を、所のお宮の屋敷へおさめてしまふ。上路でも、年徳善神ノ松と言つて、爐のある部屋に飾る。

トシダナ 西海の市野々では、茶の間の大黒柱に、松か杉を歳神様として飾り、其前に年棚を作つて、色々なお供へをする。下早川では、名稱は何と言ふかわからぬが、三尺程の白木の棚を作り、兩わきに松を立て、此の松には、懸魚を新しい藁で結ぶ。又勘定がすむと、錢を一升枺に

入れて、年神に供へる。

トシヤド 根知では、年取の晩に、旅人を泊める事を、年宿と言ひ、功德になると言つた。又同じ所では、此の旅人を、年神様だと言つて喜ぶ風もあつた。

シヨウガツサマ 濁澤では、次の様な正月様の歌を、子供達は歌うて喜ぶと言つたが、文句は少し忘れて居るらしい。

正月の神さん きこまで

キリ／＼山の腰まで

土産にや 何だ

小豆餅ね 枳餅

仙納では、鳥追に歌ふのだと言つて、やはり此の歌も教へてくれたが、終の方の土産には、繪羽子板と羽子が殖ゑて居る。即ち、

繪かきはんご板

さうの羽子

むくろんじ

カケイヲ 糸魚川では、正月神様に供へる魚は、小鯛とかセイカイとか言ふ赤い魚で、二尾揃へるからカケ魚だと言ふ。魚は二尾づゝで、一カケ二カケと数へるのである。浦本でも、懸魚は幾ら小さくても、赤モンでさへあればよいと言つて、腹合せに藁スゲで結んで供へる。此處では正月の七日迄と、十一日・十五日・二十日に上げて、下すと家中でよばれる。上路と小瀧では懸魚をオイベスサンノサカナだと言つて居る。小瀧では、藁を三本に分けて縛うた繩に、鯛の魚を二匹下げる。

シュツセイザカナ 糸魚川の一部では、青い魚のフクラゲに水引を掛けて、神棚に下げる。大和川でも、此のフクラゲを、出世魚と言ひ、正月お夷様に下げる爲に、干して置く。此の魚は、ツバイソ・フクラゲ・ブリと、大きく出世するにつれて名が變ると言ふ。

イチノヒレ 大和川では、鯛の一ノ鰭をも、お夷様に上げ、下しても女子には食はせず、主人や世継だけが食つたが、今は塩引に代つた。西海では、鯛の塩引の一ノ鰭を串に刺し、その串の先には、ホシカ鱒を刺して、なげしに差しておくと言ふ。

デク 神棚のべ繩にぶらさげる腹合せの魚は、鯛でなければならぬが、仕方のない時は、何か赤い魚をえらぶのは、下早川一般である。字青郷で、是をデクと呼ぶのは、さういふ意味である

かわからない。

オザシ 上早川の奥では、何魚を選ぶかわからぬが、生魚を栗の若木に刺し、頭をかみの方に向けて供へ、是をオザシと言つて居る。

ゴゼンザカナ 浦本では、別に大小の魚を、鉢に盛つて神棚に供へ、小さい方はすぐ下していただく。是をゴゼン魚と言ふが、ゴゼンは御飯の事であつた。

四七 歳暮と年玉

セイボ お歳暮の品は、農村では、主に吠・セナコチ・草履・藁杓などの藁製品とか、野菜とかであり、漁村では、塩鱈・フクラゲなどの魚類であつたが、近頃は反物・足袋・手拭・風呂敷・砂糖なども、用られるやうになつた。親類間では、浦本の蒟蒻七切とか、下早川のフクデ餅とかを贈るのもある。贈り先は、親類・縁者・親方或はトウド（田人）等で、「こりや少しだけき、歳暮のしるしだ」とか、「又來年お頼み申します」などと挨拶する。

ハツセイボ 上早川では、縁組をした年だけ、嫁の家へ贈るのを、初歳暮と言つた。鱈一本に反物を添へてやるのが例であるが、其他に嫁方の親戚の數だけ、手拭をつけて贈るのである。

セイボガエシ 歳暮を貰つた親方は、酒を出したり、酒を持たせて歸したりする。此のお返しを能生谷では、歳暮返しと言つた。餅米一俵の歳暮に、大鱈一本など言ふゴイセな歳暮返しもあつたと言ふ。

ダチン 歳暮の使は、子供が多いと言ふが、此の使には、蜜柑・串柿・菓子・錢等を、駄賃と

言つて與へるのが一般である。糸魚川では、此の駄賃をも歳暮と言つた。

トシトリゼン 濁澤では、年取の晩、家長が子供等一同に、年取錢といつて、お金をくれるのが例である。市振では、家と家との間の贈答はしないが、歳暮と言つて、親類の子供達にお金を與へる。

セイボヨビ 年取をしてから、本家や親方へ「結構の大年になりました。年内中は御厄介になりました。又相變らずお願い致します」と、禮に廻る風が多い。小瀧では、年を取り、宮参りを終つてから、孫共は年取の御馳走を、藁苞つこに入れて、親里へ行くのを、歳暮に行くと言つて居る。能生谷の本家・親方では、酒なまを出したが、是を歳暮招びといつた。

トシダマ 年玉は小瀧・浦本等、もうやらうがやるまいがよいと言ふ程になつた。西海・小瀧では、歳暮の品と同じやうな物を、年始廻りの時、持つて行くと言ふ。上早川では、昔は一尺に一尺二三寸位の四角な白餅の間に、豆餅をはさみ、水引を掛けて贈つたが、今は型の小さい切餅やフクデ、その他茶・砂糖・蜜柑・饅頭を用ゐるやうになつた。能生谷の川詰では、年玉は新年になつて、蠟燭とか餅とかを、親類の神佛に贈る事だと言ふ。

オネントウ 糸魚川の一部では、年玉の事を、オ年頭とも解してゐるらしい。子供は正月二日